以良都女

第二十六號

明治二十二年七月十五日發行

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十六號目次

明治二十二年八月十五日

●揷畫○少姫讀書の圖●家政○室內粧飾法○床の間の飾方(前號續)○看病法一斑(ナイチンゲール嬢述)○アイスクリーム製造法○咽喉の疾くのを止める法○桃の實を冬迄貯へる法○茄子を貯へる法○檸檬糖の製法○酒の醉を醒す法○細い細君●文藝美術○唱歌自然の聲(メレイブラドレイ女史新作)○古歌水風晩來の評(美妙齋主人)○內閣官報局新定送假名法○函谷關そこのけ●批評○國民の友の面影糾評(美妙齋主人)●小說○編就叢第六回(狗亭飯人)●雜錄○音樂大家モザート氏の傳(夢の屋)○婦人の記者○ロの說(チャーチ女史述)○十九世記雜誌婦人撰擧權を非とするの議○紐育國民雜誌の婦人批評○美術家イースト氏ノ演說○冬でも單を着る●寄書日本風と西洋風との比較(司馬あや子)●通信問答‖ペエあすの石鹼の効能及びその贋造ある事‖脚氣治療法‖瓢箪に色を附ける三法‖竹に摸樣をつける法‖黑子を去る法‖○爪際の皮の荒れたのを治す法‖ハンドコロン賣捌所‖黑子を去る法‖顏の荒れを治す法アザを去る法‖色を白くする法‖顏の毛を拔く法‖砒石の毒否‖絕美の詩‖日に燒けたのを落す法‖縮れ毛を直す法‖世界語の流行‖●近頃西洋で行はれる小說‖蚊を驅除する法‖○懸賞餘興

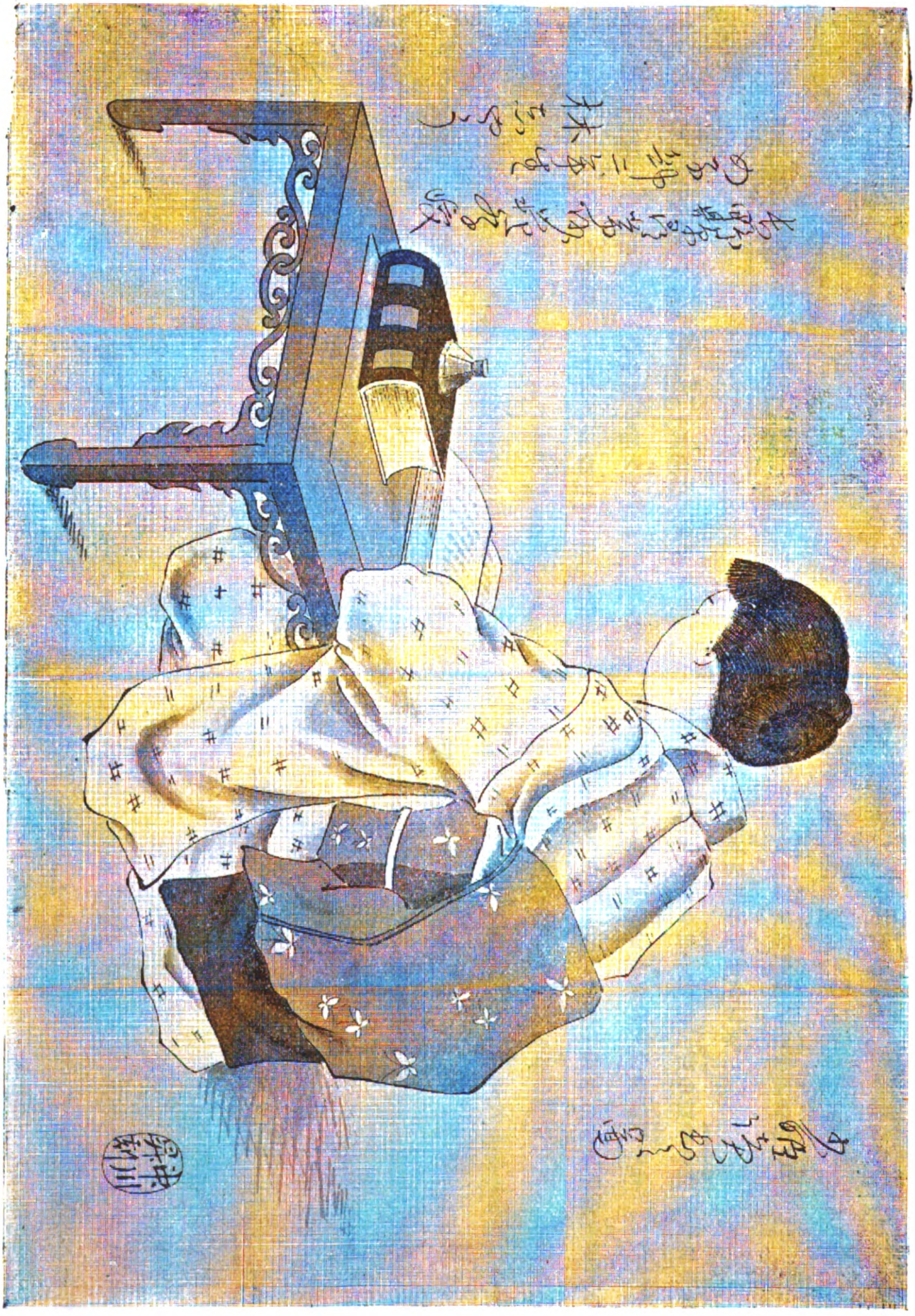
注意　別製出版の社告

いらつめ儀永く保存したいから保存に堪へる製本にしろとの御忠告が度々有りましたので、終に今度から其御厚意を無にせぬ左の方案を立てました。

(一)いらつめ第廿六號から別製の分をも作る事。(二)別製の分は優美な色刷の表紙を付け、艶も有り、色も白く、厚く、且つ丈夫な紙に本文を印刷する事。(三)從來のいらつめ通りの製本ハ今後並製とする事。(四)すべて別製は美麗堅牢を主とし、並製は實用を主とする事。(五)第廿六號に限り別製ハわづか五百部刷りましたから御注文は至急でなければ賣切になる事。(六)別製は容易に再版をせぬ事ゆゑ、賣切後はたやすく手に入らぬ事。(七)別製並製ともに記事は相同じである事。(八)並製の代價は從前の通りである事。(九)別製の代價は一册九錢、郵税共十一錢。半年分(六册)五十錢、郵税共六十二錢。一年分(十二册)九十錢、郵税共一圓十四錢。見本は一錢郵券十一枚領收の上送る事。

是と同時に記事をも一切改良しました。いらつめが始めて計畫した事は「化粧」でも、「流行」でも、「通信問答」でも、其他色々の事はすべて他の雜誌でも用ゐて居ます。今度の別製の法なども西洋で行はるる法をすこし修正していらつめで始めて用うるのです。すべて女性諸君のために有益な事は必らずいらつめが先づ行ひ出します。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十六號

家政

室内粧飾法床の間の飾り方（前號のつゞき）

二　花及び花瓶（花の枝を矯める事の善悪＝矯めぬ事の善悪＝自然派と人造派とにある弊＝自然を離れずに活けるのが肝心＝横枝を縦にするのは不道理＝花を床に置く趣意＝床と花とを見合はせる事＝掛物と花とを見合せることと＝横物や二幅對に花を見合せる心得＝縦物に花を見合せる心得＝掛物の繪との花との取合はせ方

掛物の掛け方に就ては一應前號で心得を述べましたから今度は花と花瓶との事に移ります、　花と花瓶とは實に床の間の命とも言ふべきもの、その取り扱ひ方に至ッては掛物より却ッて六づかしいです。　昔から活花は一つの修業となッて居たくらゐの事、委しく書けばそれこそ大變です。　よッて爰では専ら初學に授ける心得を旨とし、その間すこしづゝ高尚な、極意のところを言ふ心得、即ち是から言ふところは花や草の水の揚げ方に就てハ成るべく言はず、むしろ美となす組み方、立て方に就ての注意を主とするのです。

『イ』　花や木の枝を矯めること。

流儀によつてひどく枝を矯め、或ひは全く矯めぬのも有りますが、いづれも一方に片寄つてわるい事です。　つら〳〵一方が矯めるのを主とし、また一方が矯めぬのを主とする原因を考へれば、いづれにも一理は有るのです。　矯めるのを主眼とする方は人造で及ぶだけの美をつくらうと考へるためで、矯めぬのを尚ぶ方はすべて物を自然の儘にして置かうと望むのです。　併しながら自然の儘を尚ぶ極は遂に得手勝手時に餘りな事も自然と崇めてその崇めた心に服せられて美と考へるやうな弊も起ります。　ならば矯める方にはその弊が無いかと言ふと、その弊こそ有りませんが、また同じやうな弊が有ります。　すなはち餘り巧みを弄し過ぎて、果は人造で窮窟至極の枝ぶりなど拵らへてそれで満足するのです。自然に生へて居る物かならずしも人造で矯めたかと思はれぬもののみで無く、また人造の物かならず自然に近寄らぬ物ばかりでは有りません。　二方の主義いづれも至當な事です。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が、立て別れて仕舞ふのは惡いことです。　强ひて奇を求めて矯めるのも宜くない事ですが、また投げ放しにするのも固陋な話です。　花に勘能な宗匠はいくらも世に有ります。が、これらの一方に偏するものが多くて、實に美を爲せさへすればいふと言つて望むよりは却つて規則や流儀から美を作らうと望むばかりで、もつとも慨かはしいことです。

今どちらにも充分服さぬ代りに吾々は何方をでも公平に評し、そして兩方から粹を取つた、完全の活け方を定めることが出來やうと思ひます。　廣く盆栽に就いて之を言つても一時は中々はやつた杉を鶴や船の形などに作る法、それなどは最も非難すべきことで、なぜと言へば杉の葉の美を見せるよりむしろ手際の巧みなのを見せるばかりであるからです。菊人形が識者に擯斥されるのも同じ理です。　之に因つて思へば自然を離れた人造の手際が最もいやしむ事なのです。すなはち杉の直立して居るのは自然、それが鶴や船の形になつて居るのは決して自然で無く、また菊が一輪高く咲いて居るのは自然、それが人や獸の形になつて居るのは充分天理で無い、其處です。　しかし、それなら松が有つて、その松は俗に言ふと[illegible]盤で、根さへ幾筋かあらはれて高く抽き出て居る、それは無論人造の手際、それも惡いかと言へば決して惡くは有りません。　その故は其樣な松は自然にも有るからです。　峯の角、崖の横などに往々このやうな松を見掛けるそれに擬して人造で作ッたからには、たとひ松の自然は損じても自然の自然は損じてありません、自然を人造に縮めたのです、即ちこれは自然をはなれぬ人造の手際で、尤も賞美することです。　すべて愛玩する花に對しては是れだけの注意が是非無くては爲らぬ事です。

今までは人造派の方に攻擊しましたが、是からは自然派の方に鉾を入れましやう。　自然派の方では矢鱈に木の態をかへぬやう、作らぬやうとのみ力めます。　が、考へても御覽なさい、爰に桃の枝一本が有ッてそれを小さな花瓶にでも挿すとして、自然派は（場合も色々有りますが）時にそれを眞直に活けることも有ります。　が、これらの枝は實は桃の横枝なのです、一寸見れば知れませんが、横枝と縱幹とはおのづから違ッて居ます。　横であるべきが天理、それを縱に挿して態もいくらず、それで自然を得たと言へましやうか。一目見て無理と思はれて、むしろ矯めたのに劣る心地の爲ます（西洋人が解する美の中には間々この邊の弊も有りますが

他日を待つて言ひましやう)。

これらは實に兩方の派の末への攻撃ですが、しかし一寸必得よならぬことは有りますまい。右のとほりつら〳〵論じ出せば際限もあいほど二流に弊がれの〳〵有ります。この弊を除いて兩方の長を取ることが出來あいかと言ふよ、出來ない事は有りません。即ち第一、床と見合はせて更に草木自身と見合はせ、必要に從つて矯め、必要がなければ決して矯めぬ、これです。

元來花(草木をも總稱す、以下皆同)を床よ置くろの趣意は何處よ有ります。只一つの花瓶か鉢の中よ天地自然の趣を取り收め、即ち掛物とも呼び合はせ、相助けさせ、深山幽谷の景色、喬木平原の姿をつくろ、これが主眼なのです。で、この主眼に達して居るのが即ちいはゆる美を作して居るのです、この目的さへ達するよ於ては何のやうあ活け方、つくり方をしても決して惡いものでは無いのです。で、今假よ規則めいた物を作ッた、その説明として見ましやう。

床と見合はせる事。これが甚だ手易いやうで、さて恐ろしく六づかしい事です。床と見合はせると一口よは言ひますが、ろの實その中よは掛物と見合はせる事、壁色と見合はせることを、花瓶の色と見合はせる事、及び床づくりと見合はせることと、これらの箇條を含んで居ます。

掛物と見合はせるのは第一よ注意すべきことです。、兎に角床の花瓶の花や葉で掛物の面を多少邪魔するやうにするのは無術の至りです。掛物が縱物あらば、矮い花が尤も望ましいもので、で無ければ枝の痩せたもの、乃至葉の濃くないものでも宜しいです。しかし餘り伸びさせるのは矢張惡いです。掛物が横物か二幅對ならば伸びたものを插しても、葉の濃いものを插しても決して差支へは有りません。

これは形から言ッただけの掛物と花との見合はせ方です。趣向からの見合せ、また注意が肝心です。掛物が書であるなら花は何でも宜しいですが、畫である時には取り合はせが入ります。掛物の畫が梅である、その下に秋菊を插すのも不作法の至りです。是等は見易いところ併しもッと六づかしい處も有ります。即ち掛物が源氏畫などで有る、その前へ新渡の花などを活けること、隨分珍らし好きの人は爲ます。が、論の無い不手際です。すべて花は掛物を助けるもので爲ければ爲りません。掛物の畫が秋野の鶉であッて、而も畫面に桔梗か女郎花でも無かッたなら

そこで花に桔梗か女郎花を用ゐる、これが最も堪能なところです。即ち花で掛物を助けること、これが主眼です。が、また爰にまた一つ別の例が有ります。月下老梅の掛物の前に時候の梅を活けて、それで相助けて居るかと言ふに、決して左様で有りません。同じ物で同じ物に對するのは相犯すといふのです、いはゆる重複です。月下老梅の圖で梅が幾株も有るだけの餘韻は出て居ます、そこへまた本當の梅を持ち出すのはつまり掛物の畵面を殺して仕舞ふ譯です。ならばこの場合には何を用ゐたが宜いかと言ふに、品の變ッたものあらば宜しいので、水仙や福壽草など實に申分の無い相手です。（この段未完）

看病法一斑（第廿二號の續）

物音に就て（承前）

ふろれんす　ないちんげエる述

また病人に幾度も同じことを言ひ付けさせるのは看病法でありません。幾度も命令して居る内には病人が乾度いらだッて腹を立つ、すると病にさはります。

すべてその時の心得を言へば、病人と話しをするにも決して病人の後や、また遠くから言ふものではありません。物を言ひ掛けるにも決して突然にせず、しづかに病人の前へ行ッて是から物を言ひ掛けるといふ體を見せてそれから言ふのが最上です。

また病人が何か物を言ふ時にはいはれなくその話しを横取りするのは惡いです。看病婦に因ッては病人が一寸無間ばなしを始めてもその噺の行く先きなど自分が受け取ッて言ひ盡くして仕舞ふものも有ります。一寸氣が利いて居るやうにも見えますが、實は愚の至りです。さうすると病人は折角の興をさまして仕舞ふもので、忌々しく思ふものです。たとひ話がわかり切ッて居る事にしろ、熱心に、誠實に聞き訖り、聞き訖ッては同じ事を無駄に二度たづねぬやうにする、是が極意のところです。

病人がしきりに話しを好んで爲るのを無理に抑へさせるのも亦よくありません。其時は見料らひを付けてそれと當り障りの無い話しをするのが看病婦の任です。併し、初め醫者から心得を聞いて置き、この病人は長く話しをした方がいゝか、短くした方がいゝか、いづれとも心得て置いて、それ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

でその工合に因り話しをするのが宜しいのです。　極意さする處は、もし病人が長い話が適するならその話しはいかにも愉快で、そして自然に長くなるやうにするのが肝要です。あまり縁が遠く、病人がよほど考へなくては分からぬといふやうな話しは爲ぬ物です。　また病人にみじかい話が適當するものならば、なるたけ不愉快で無い内に話しが終るやうに筋を運ぶのが肝心です。　また餘脈の殘つて居るところで突然話しの尾を切つて仕舞ふのは最もわるいことで、いつそ病人につまらぬ氣をもませる種となることと、忘れても〳〵謹しまなければ爲りません。　前の長く話をするよりへこのみじかくする方が餘程六づかしいです。　看病婦の熟練不熟練は大抵この見料らひや仕こなしの利く處にあると無いのです。

　そして若し話しをして一時間もつと多くも話しをして居たならば、それから話しが終つて用事をするため部所を出たにしろ、始終病人の樣子を氣に注めるやうにしなくてはいけません。　それで病人がたとひ進んで長く話しをしたにしろその顔色か何かすこしでも衰へて來たやうならばその心得をしなければ爲りません。　既にから見とめたからにはまた後に病人が長い話しを望んでも然るべく氣にさはらぬやう氣を注けるのです。　そして、病人の顔色が多少わるかツたにしろ、決してそのやうな事は口にも言はず、「大層御顔色が浮かして來ました」とか何とか、成るたけ引き立たせるやうに骨を折るのが必要です。　ほとんど藥らしい藥とば用ゐずに只心の勵ましから病人を恢復させた話しはよく昔ばなしに有りますが、あながち是は假作物がたりのみで無く、實際精神が身体に於ける作用のいちじるしいのは生理學者の充分に見留めたところです。

　兎角に病人といふものは精神が不公平に鋭敏になり過ぎるもので、それ故一日よくて一日わるいと更にそれを氣にしたり何かして迚もならぬのかなどと鬱ぎ出します。　その時にあたり、たとひ實際わるいと見えたにしろ、「いや、昨日と同じくらゐ」ぐらゐに賺かすのがい丶のです。　「昨日よりもい丶」などとわたり形容に過ぎた事を言ふと病人の忌氣を起させるもので、また「昨日と同じぐらゐ」と云つても病人が承知せぬやうであれば、「起り醒めが有るのが病氣の常ゆゑ左樣心配するには及ばぬ」などあるたけ辨護するやうにする事です。

　病人の臥床を必要もないのに動かしたり、障いたりするの

は最もわるい事です。
すべて看病婦は病人を敬相して、そして病人から愛されるやうで無ければ爲りません。　看病婦がいかにも病人を敬愛するやうであれば病人も看病婦を愛するもので、自然に看病婦の爲る事、云ふ事を一も二も無く信用するやうに爲り、そこで看病婦が云つた奨ましの言葉も最もよく病人に容れられませう

（未完）

アイスクリーム製造法

アイスクリームは滋養にも爲り、且つ甚だ美味なものですが、製造法が一寸手易くないため手製にするのが不便ですが、下にしるす法はその患が無くアイスクリーム製造の中最も簡略です
まづ直徑三寸ぐらゐの鉄葉の茶壺を取つて、蓋を捨て更に直徑四寸乃至五寸ぐらゐの鉄葉の、前と同じやうな筒をつくらせ、これで器械は出來ました。　そして小さな方の筒に砂糖、牛乳、レモン水、或ひは蜜柑水などの混合物を適宜の分量にして交ぜて入れ、この小筒を大筒の中へ入れ、そして大筒の中に冷水を入れ、之に結晶硝酸アンモニヤを入れると、結晶硝酸アンモニヤが鎔けるに從ひ、大筒の水は非常に冷たくなツて終にそれに接して居る小筒の中の混合物は氷ります。
この氷ッたのが即ちアイスクリームです。

咽喉の乾くのを止める法

咽喉の乾くに任せてあまり多く飲料を用ゐるのは衛生上有害です。　それ故、すこし飲んで早く乾くのを止めるのが肝要です。　之をするには一合の水に酢十五六滴の割合で交ぜその水を飲むのです。　不思議のやうに咽喉の乾くのは止まるものです。　たゞし、鰻を食べた直後にはこの水を飲んではいけません

桃實を冬まで貯へる法

是は時節柄御なぐさみに至極宜しいです。　麥糊を粥のやうにどろ〳〵に煮立て、鹽をすこし入れて冷まし、十分冷めた時を見計らひ、よく熟した桃の實をその中に肌と肌と接かぬやうにして埋め、容器の口を密封して置くのです。　冬にあつて取り出して食べても味はすこしも變はりません。　尤も熟し過ぎ、または不熟の桃は貯へられません。

茄子をたくはへる法

壺の中に豆腐精を入れ、新らしい茄子を埋め、透間なく精で蔽し、密封して置くのです。

檸檬糖の製法

暑中の飲料はアイスクリームか檸檬糖です。白砂糖四ホンド、酒石酸一オンス、レモン精二ドラム、この三品をよく混ぜ合はせたものが檸檬糖で、コップ一杯にこれを茶匕二つ三つ入れゝば美事なレモン水が出來ます。

酒の酔をさます法

通常の水飲コップにアンモニア二三滴たらして飲めば直に酔はさめます。

細い細君――妻君が煮肴を臺所に置くと、いつの間にかその魚が紛失して仕舞ひました。

「清や、一寸」。細君が直に下めを呼びました。

「はい」。

「こゝにあッた御肴御前どこへ御やりだ」。

「存じません、すこし考へて、「わ、奥さま、その御肴はあの玉（猫の名）が取りました。

「あに玉が取ッた。本當かえ」。

「はい。取ッて食べて仕舞ひました」。

何を思ッてか直に細君は立つて自身に秤を取つて來て猫を掛けて見て、そして見る〳〵聲をするどくしました。

「清ッ、嘘を御吐き。御前が取ッたのだ」。

「いゝえ、奥さま……」

「だまッて御出で、この玉はいつも百三十匁で、もし御魚を食べたものなら百五十匁ぐらゐに爲ッて居る譯だよ」。

言ッて見詰められて下女は終に頭を低げました。

「奥さま、まことに恐れ入りました」。

文藝美術

自然の聲（唱歌）　メレイ　ブラッドレイ英新作

久しく　自然の　門は　叩く　とも、　自然は　さだかに
こたへ　せじ――自然は　言はず、　唖ぞ　かし。　ことふ
る　ものは　うつそみの　魂、　ことに　現身の　女子の
魂。――ツルゲーチフ。

自然の聲の多さよ。風だにもさま〳〵の音すなり――

笑聲はとぶもあれば、なげき、うめくもあり。
さゝやく木々、海にはしりゆく水、
すべて聲はする——さどれ唯我にこたへぬのみ。

夏のあさぼらけ、夏の最中、——
その額かざる薔薇、その胸の露の眞珠、——
ひざまづきてわれもその足を舐む。
「語りてよ、母の自然—やさしき聖慮を知らせてよ」。

小川はつぶやく。蜂はくでもる。
空の果よりかすかに聲もらす雲雀。
たゞ我をあざけるばかり。心あるこたへを待てど。
更に來ず、葉うらよりも、遠里の鳥よりも。

望みを失なひてひとり盲、「今は求めじ、
今よりは、自然、君の戸をたゝかじ。
願へども君はこたへず。呼べども、君は來らず。
のぞみ盡きしに非ずや。自然は耳聾ひ、口唖なり」。

頼り盡きて、取り付く島もなく
盲めきてさすらは道、うつそみの魂に遇ひぬ、——
魂、得てたふる魂、料らざりし身に
嬉しさの油、命の酒をそゝぎたる。

あな、ゆかしき、——今は闇も後絶えぬ、
うるはしき聲はわが耳にもこたへけり。
思へば「愛」こそ奇しきしらべ、さてこそ
自然に求めしをはからず婦人に見たりけれ。

右はブラッドレイ女史の近作で露國のツルゲーチフの句爲から脱してつくッた詩で、それ故に前にツルゲーチフの原句も載せてあるのです。この歌の趣向を褒めるのはブラッドレイ女史を褒めるよりはむしろツルゲーチフを褒める譯になります。趣向の婉しさ、しかも雄大の氣象は勃々として居るところ、稱しても足りません。飜譯はたゞ意味の通ずるのそのみ勉めました

古歌水風晩來の評　　美妙齋主人

水風晩來の古歌は著聞集にくはしく出て居て、顯季、雅定俊頼、顯輔なぞの大筆が各一首を詠じたものです。これは歌合はせで作ッたのでも無いため、前人の評論もありません。そこで今評釋して見ることゝなりました。

水風晩來

(一)風ふけば浪とや秋のたちぬらむ、渚すゞしき夏の夕暮。
　大學頭　敦光

(二)夕月夜むすぶ泉はなけれども、志賀の浦風涼しかりけり。
　修理大夫顯季

(三)大ぬさや夕浪たつる風ふけば、まだきに秋といはれのゝ池。
　右兵衛　實行

(四)夕されば河風涼し水の上に浪ならねども秋やたつらむ。
　内藏頭　長實

(五)槙ながすあなしの河に風吹きて此夕暮ぞ浪さやにたつ。
　右馬頭　經忠

(六)夕暮の浪華堀江に風ふけば葦の下葉ぞなにみ折らるゝ。
　右近中將雅定

　源　俊頼

(七)夕日さす野守の鏡かひもなく、ふれける風に影し添はねば。
　中務權大輔顯輔

(八)まだきより秋は龍田の川風の涼しき暮に思ひ知られぬ。
　散位　道經

(九)手に結ぶいさら小川のまし水に袂涼しく夕風ぞふく。
　式部少輔行盛

(十)水のあやを吹來る風の夕月よ、浪のたつなる衣かさなん。
　散位　顯仲

(十一)夕さればなつみの川をこす風の涼しきにこそ秋も侍れず。
　少納言　宗兼

(十二)谷河の北より風の吹來れば岸も浪こそ涼しかりけれ。
　皇后宮少進藤原爲忠

(十三)茜さすひのくま川の夕蔭に瀨ふく風は秋ぞ來にける。

以上十三首の歌の中で、よく見れば多少の意味は相違して居るにしろ、趣向は相同じやうなのが有ります。それ故、相似寄つた部類分けの中で評論をし、更にその中のすぐれたのを取つて全体から價値を定めて見るのが一番至當でしやう。水風晩來といへば既に題からして涼しいといふ心を含んで

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

居る譯、それで十三首いづれもこの意味です。が、涼しいといふ事を明言したのと爲ぬのとあります。(五)、(六)、(七)、及び(十)だけが明言しませんでした。その餘はみな明言しました

明言した方の第一番に出て來たのは敦光のです。一首の中作者の手際は第二及び第三句、「浪とや秋のたちぬらん」にわります。秋が立つといふ事を直に浪に取り寄せた簡潔のところは後の人が眞似てもいゝ句法です。しかし、歌全体から言へば、この歌は姿を主としたものです。立つさゞ浪の色に秋の涼しさが既に見えると言ひ、それにも足らず猶「みぎは涼しき」と説明しましたが、風情といふものは何處にあるか、たしかな着目もありません。そればかりか、先涼しさを渚から見付け出したのは浪の足を土臺とした着眼ですが、しかし小さな規摸です。

第二、顯季の歌、この規摸はさすがに作者が作者だけあつて前よりも大きいです。どの句でも透間の無いのみか、猶その中に抑揚て、趣を見せたのは大きな腕です。夕月夜に泉を掬ぶのは誰にもわかる涼しい事の最上、それも無い、それて涼しいとは中々の風情です。前の歌と比較すれば規摸の大小が直にわかりましやう。前のは風、浪、水際、夕暮の色、これらが一首の材料です。後のは夕月夜、泉、泉を掬ぶ事、浦風、浦浪、これらが一首の材料です。

第三、實行の歌、規摸より何より掛詞ですぐれた作です。が、掛詞は歌のなめらかさをつくる手段だけで、決して歌の姿や風情には關係するもので有りません。よッて掛詞ですぐれた處を取り去ッて更に歌全体の趣について言へば何うでしやう。變はッた節もない、わたりまへの趣といふ外は有りません。讀んでは玉をころばすやうに滑です。しかし骨を絞れば敦光のよりも猶劣ッて居ます。掛詞にしばられると動もすればこの失策は有ります。特に韻を尙ぶ論者の一つ考べき事です。幣を浪にした處がまだ切めてもです。

第四、長實の歌、この歌は敦光のと途を違へて同じ目的に至つたものです。既に「川風」を第二句に出した、それで浪のたつ事は分かる、それ故、直に轉じて浪よりは秋が立つと言つて涼しさを一層涼く見せたのは貫之の俤が有る、愉快な取り付けです。あらば、敦光のと比べてどちらが優つて居ましやう。つらく之を比較するに敦光のには「浪とや秋の立ちぬらん」といふ秀句が有つて、またこの長實のには

「涙ならねども秋やたつらむ」の秀句が有ります。前のは涙が重くて秋が輕く、後のは秋が重くて涙が輕いです。そして意味の大小みな相同じで、それ故優劣は定められません

第五、第六、及び第七は類がちがひますから後にゆづッて直ぐ第八にかゝりしやう、

第八、顯輔の歌、一つの掛詞で恐ろしく大きな意味を包括した作です。略筆で充分の心をあらはす歌の摸範には尤も宜しい作でせう。「またきより」の句が有るために「思ひ知られぬ」の句が活きて居ます。秋は立田に早く催すとは聞いたが、實際來て見ぬ内は深くも信じなかつた。けれど、今來て見て如何にも涼しいと思ひ知つた、意味は是です。ならば顯季のと比べて優劣は如何でしやう。

俊成と定家、顯季と顯輔、父子よくも揃つた大家でせう。そして銘々父子の間に隱然ちがつた歌の風を持つ事は今更言ふまでも無い事ですが、その一斑はこゝでも知れます。顯季の歌は海を本とした作、そして顯輔のは川を旨とした作、土臺にこの相違が有りますから意匠の違ふのもまた無理の無い事です。そして二首の特異といふものは顯季のは大きなものを小さく受け、また顯輔のは小さなものを大きく取つた事です。前のは海を出し、浦風を出し、月を出し、そして泉、しかも手で掬べるほどの泉を出し、大きな天地をわづかの手の中に揉み込んで仕舞ひましたが、後のは全く之とちがひ、はじめ立田川ぐらゐの物を出し、姿に大きな物が無いため、感情の大きなので受けました。も一つ、別の途から二首の相違を言へば、前のは大きなものが姿で小さく受けました。後のは小さなものを風情で大きく取りました。前の方は自然を手に取つて手遊物にするやうで、後のは自然を其處へ置いてその宏大なのを酌みわけたやうです。

實にしるれるとみるとんとは相似たやうな詩人、しかし同じ似寄の中にも猶雄大な筆行きに於て、しるれるは宇宙を味はひ、みるとんは宇宙を呑みました。李白と賈島との相違もまた同様です。李白は多少みるとんに似て、賈嶋は殆んどしるれるです。顯季と顯輔との諸作を比較した上でそのやうな形迹が見えるかと云ふに、

さくら花にほふにつけてものぞ思ふ、
風のこゝろのうしろめたさに。――新後拾遺　顯季

天の川よこぎる雲やたなばたの
空炷ものゝけふりなるらむ。――詞花　顯輔

また、

鴫のふすかど田にたてる稻ぐきの
否とは人の云ずもあらなむ。―― 後拾遺顯季

それを

玉きはる命もしらずわかれぬる
人をまつべき身こそ老いけれ。―― 續古今顯輔

兎角一方は物を砕いて見るのが質、そして一方は組んで見るのが質です。　分解の目は顯季に多く總合の目は顯輔に多いといふのが無理でしやうか。　顯季は批評して悟り、顯輔は悟つて批評します。

すでにこの相違が有るからには一派同質の文學としての評は迚もこの二人に加へられますまい。　水風晩來の二人の歌に、それ故、優劣をつけるのは水風晩來といふだけの題意のところでよく何方が讀み得たかを云ふだけです。

さうあれば、顯季は磨いた玉で、顯輔は璞です。　顯季はこまかく目がついて、顯輔は全体に心がまはり、顯季は都の美人とあつて、顯輔は鄙の處女とありました。　こゝまでが批評らしい批評で濟みます。　が、この上は嗜好の範圍です批評の力の入るところでは有りません。　(未完)

内閣官報局新定送假名法

送假名法の杜撰されまつた世の中、官報局で新に之を決められたのは最も喜ばしい事で、大方の新聞雜誌をはじめとしすべて世の文は成るべくこの規定によりたいものです。　今その送假名法の全文を得ましたからこゝへ載せませう。

送假名法

總則

假名交文ニ於ケル眞名ト假名トノ關係ハ眞名ハ言語ノ首本ノ變化セザル所ヲ寫シ假名ハ其末尾ノ變化スル所ヲ寫スモノナリ兩者ノ關係正ニ斯ノ如クナルヨリシテ左ニ示ス所ノ送假名法ノ二大原則ヲ生ス

第一原則　語尾變化セサルモノハ送假名ヲ附セス

第二原則　語尾變化スルモノハ其變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス

右ハ送假名法ノ二大原則ナリ然リト雖モ間々古來ノ慣用ト便宜トニ依リ左ノ如キ變則ニ從フ

第一變則　語尾變化セサルモノト雖モ慣用ト便宜トニ從ヒ送假名ヲ附スルコトアリ

第二變則　語尾變化スルモノト雖モ罕ニハ慣用ト便宜トニ從ヒ送假名ヲ附セサルコトアリ

今邦語八品詞ヲ右四則ニ配當スレハ大要左ノ如シ

名詞、代名詞、及感嘆詞　第一原則

動詞及形容詞　第二原則

副詞、接續詞及後置詞　第一變則

動詞ヨリ轉成セル名詞及副詞　第二變則

右大別配當ハ固ヨリ大體ニ就キテ之ヲ言フモノニシテ各自例外ナキニアラス其詳細ハ各品詞ノ條ニ就キテ之ヲ了知スヘシ

○名　詞

凡ソ名詞ニ三種アリ（一）本然名詞（二）轉成名詞（三）合成名詞是ナリ

右三種名詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第一則　本然名詞ハ總テ送假名ヲ附セス

第二則　（甲）形容詞ノ轉成名詞ハ總テ送假名ヲ附ス

（乙）動詞ノ轉成名詞ハ通常送假名ヲ附セス但シ同字異義ナルモノハ便宜送假名ヲ附ス

第三則　合成名詞ハ通常送假名ヲ附セス但シ同字異義ナルモノハ便宜送假名ヲ附ス

（釋例）

（第一）本然名詞　本然名詞トハ事物ニ命シタル名稱ニシテ其語尾變化スルモノニアラス故ニ本然名詞ニハ送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

日(ヒ)　月(ツキ)　星(ホシ)　雨(アメ)　雪(ユキ)　風(カゼ)　山(ヤマ)　川(カハ)

草(クサ)　木(キ)　春(ハル)　秋(アキ)　東(ヒガシ)　西(ニシ)　上(カミ)　下(シモ)

神(カミ)　人(ヒト)　男(ヲトコ)　女(ヲミナ)　手(テ)　足(アシ)　飯(イヒ)　酒(サケ)

衣(コロモ)　机(ツクエ)　書(フミ)　花(ハナ)　鳥(トリ)　聲(コヱ)　夢(ユメ)　時(トキ)

（第二）轉成名詞　轉成名詞トハ他詞ノ轉シテ名詞ト成レル者ヲ謂フ轉成名詞ニ二種アリ即チ一（甲）ハ形容詞ヨリ轉成セルモノ一（乙）ハ動詞ヨリ轉成セルモノ是ナリ

（甲）形容詞ヨリ轉成セル名詞ニ四種アリ（一）「キ」若クハ「ナル」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語尾ニ「サ」ヲ帶ヒ（二）「シキ」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語尾ニ「シサ」ヲ帶ヒ（三）「ケキ」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語尾ニ「ケサ」ヲ帶ヒ（四）「キ」ヲ履ム形容詞ヨリ轉成セルモノニシテ其語尾ニ「ミ」ヲ帶フ而シテ此等四種ノ轉成名詞ハ皆其語尾ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

（一）重サ　輕サ　黒サ　白サ　遲サ　速サ
高サ　廣サ　太サ　深サ　遠サ　長サ
靜サ　速サ　明サ　平サ　美麗サ　苛酷サ

（二）樂シサ　寂シサ　美レサ　苦シサ　甚シサ　烈シサ
賤シサ　親シサ　貧シサ　嬉シサ　悲シサ　恠シサ

（三）爽ケサ　靜ケサ　遙ケサ　明ケサ　露ケサ　寒ケサ
安ケサ　長閑ケサ

（四）重ミ　厚ミ　苦ミ　黒ミ　深ミ　高ミ
暖ミ　面白ミ　可笑ミ

（乙）動詞ヨリ轉成セル名詞ハ皆盡ク本然動詞ノ連動言ニシテ四段活用、中二段活用、及一段活用ニ屬スル動詞ハ總テ五十連音ノ第二段ノ音即チ「キ」「シ」「チ」「ヒ」「ミ」「イ」「リ」ノ音ヲ以テ轉シ其下二段活用ニ屬スル詞ハ皆五十音連ノ第四段ノ音即チ「エ」「ケ」「セ」「テ」「チ」「ヘ」「メ」「エ」「レ」「エ」ノ音ヲ以テ轉ス此等動詞轉成名詞ハ本然動詞ト判然區別セシムルタメ送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

燒　向　嘆　趣　飽　寫　增　蒸

貸　嘶　嘩　勝　打　持　請　舞

謠　問　疑　思　願　戰　諂　惑
爭　樂　悲　惱　憎　妬　苦　頼
代　借　曲　張　募　滯　祭　悟
譏　契　眠　釣（以上四段活用）
耻　用　媚　錆　綻　憂　恨　浴
報　戀　老　悔（以上中二段活用）
告　受　屆　妨　助　痩　寄　尋
束　教　譬　衰　答　改　定　留
染　覺　費　支　榮　開　見　冷
流　懼　戲　晴　飢（以上下二段活用）
試　鑑　顧（以上上一段活用）

又一字ニテ二樣ノ意義アル動詞轉成名詞及音訓兩用ノモノニシテ特ニ其訓讀ヲ要スルモノハ時宜ニ依リ送假名ヲ附シ以テ之ヲ分別スルコトアリ其例左ノ如シ

預リ　預ケ　起キ　起リ　定メ　定リ
悔イ　悔ミ　向キ　向ケ
樂　樂ミ　營　營ミ

又動詞ノ終止言ヲ其儘ニ若クハ之ニ「コト」ヲ加ヘテ名詞ノ如ク用フルコトアリ此場合ニ於テハ動詞本然ノ語

尾ヲ寫スヘシ其例左ノ如シ

往々ヲ送リ　來ルヲ迎フ　入ル(又ハ入ルコト)ヲ量リ　出ツル(又ハ出ルコト)ヲ量ラス

(第三)合成名詞　合成名詞トハ二箇以上ノ詞ノ連合シテ熟語名詞ヲ成セルモノニシテ之ヲ分チテ六種トス(一)本然名詞ト本然名詞ト連合セルモノ(二)形容詞ト本然名詞ト連合セルモノ(三)形容動詞ト本然名詞ト連合セルモノ(四)本然名詞ト動詞轉成名詞ト連合セルモノ(五)本然動詞ト動詞轉成名詞ト連合セルモノ(六)形容詞ト動詞轉成名詞ト連合セルモノ是レナリ此六種ハ孰モ送假名ヲ附セサルヲ常トス其例左ノ如シ

(一)
水田　山櫻　春風　月夜　霜月　海魚　春蠶
松茸　藍玉　鈴虫　種紙　藁紙　毛絲　酒樽

(二)
生絲　荷物　厚紙　古手　長靴　淺瀨　古寺
早業　白魚　薄茶　甘酒　太物　黑馬　新身

(三)
枯草　塗板　蒔繪　乘物　織物　糶市　釣鐘
渡船　飛火　借屋　繰言　卷烟草　摺附木

(四)
襟卷　冬著　水呑　筆立　毛拔　地押　山崩
芝居　實入　年寄　人込　荷造　荷持　車寄

(五)
屆出　差支　見込　折合　問合　取扱　糶賣
繰替　取引　買進　見合　引受　受取　立消

(六)(早出　遠乘　古著　近附　太織　黑塗　早起

此等ノ合成名詞內ノ同字ニテ異義ヲ有スルモノハ便宜送假名ヲ附シテ以テ其孰ノ意義タルヤヲ判別スルヲ要ス例ヘハ入口ハ入リ口又ハ入レ口ナリヤヲ判別スルタメ「リ」又ハ「レ」ヲ加ヘ預主ハ預ケ主又ハ預リ主ナリヤヲ判別スルタメ「ケ」又ハ「リ」ヲ加ヘ押入ハ押入リ又ハ押入レナリヤヲ判別スルタメ「リ」又ハ「レ」ヲ加フルカ如キ是ナリ

○代名詞

凡ソ代名詞ニ三種アリ(第一)人代名詞(第二)指示代名詞(第三)疑問代名詞是ナリ

右三種代名詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第四則　人代名詞、指示代名詞、及疑問代名詞ハ孰モ送假名ヲ附セズ

(釋例)

(第一)人代名詞　人代名詞トハ人名ニ代用セラルヽモノニシテ之ヲ再別シテ二トス(一)與稱人代名詞(二)假稱

人代名詞是ナリ

(一)真称人代名詞トハ本来人名ヲ代示スルモノナリ其例左ノ如シ

朕　我　吾　余　予　己

汝　彼

(二)假称人代名詞トハ他物ノ名ヲ取リテ代名詞ト為シタルモノナリ其例左ノ如シ

身　僕　童　妾　此方　私

手前　君　主　其方　其許　那方

真假両種ノ人代名詞ノ複数モ亦送假名ヲ附セス其例左ノ如シ

我等　余等　余輩　我輩　吾輩

吾曹　我儕　身共　私共　僕等

汝輩　君等　汝等　主達　汝達

彼輩　彼等

(第二)指示代名詞　指示代名詞トハ或ル人或ル事物ヲ指示シテ其名詞ノ代ニ用ヒラルヽモノナリ其例左ノ如シ

是　此　維　斯　之　其　夫　彼

(第三)疑問代名詞　疑問代名詞トハ人ナリ又事物ナリ判然之ヲ指定シ能ハサル場合ニ其人又ハ其事物ヲ代表疑問スルタメニ用フルモノナリ其例左ノ如シ

誰　孰　何

以上三種ノ代名詞ニシテ「カ」又ハ「ノ」又ハ「ノ」ヲ以テ受ケタルトキハ總テ其「カ」又ハ「ノ」ヲ寫シテ送假名トスヘキモノナレトモ彼　此　其　我　ノ四詞ハ便宜ニ任シテ之ヲ寫サス

○形容詞

凡ソ形容詞ニ四種アリ(第一)本然形容詞語尾ヲ履ム形容詞(第二)他種ノ詞ヲ履ム形容詞(第三)指示形容詞(第四)數形容詞(第五)合成形容詞是ナリ

右四種ノ形容詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第五則　本然形容詞語尾ヲ履ムモノハ其語尾ヲ寫シテ送假名トス

第六則　他種ノ詞ヲ履ムモノハ其語尾ヲ寫シテ送假名トス

第七則　指示形容詞ヲ漢字ニテ寫ストキハ總テ送假名ヲ附セス

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第八則　數形容詞ハ送假名ヲ附セズ但シ一ヨリ九ニ至ル數形容詞ニシテ音訓兩讀ノモノヲ特ニ訓讀セシムルトキハ便宜「ツ」等ノ語尾ヲ寫シテ送假名トスルコトアルヘシ

第九則　合成形容詞ハ唯下ニ連リタル詞ノ語尾ヲ寫シテ送假名トス

（釋例）

（第一）本然形容詞　本然形容語尾ヲ履ム形容詞ニ三種アリ（一）其語尾ニ「キ」ヲ履ムモノ（二）其語尾ニ「シキ」ヲ履ムモノ（三）其語尾ニ「ケキ」ヲ履ムモノ是ナリ此等三種共ニ其語尾ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

（一）
善キ　惡キ　早キ　遲キ　遠キ
近キ　長キ　短キ　太キ　細キ
薄キ　厚キ　高キ　低キ　白キ
黑キ　明キ　暗キ　古キ　尊キ
憎キ　强キ　脆キ　全キ

（二）
宜シキ　惡シキ　樂シキ　苦シキ　嬉シキ
悲シキ　寂シキ　騷シキ　厭シキ　貧シキ

（三）
親シキ　美シキ　烈シキ　正シキ　同シキ
怪シキ　甚シキ　睦シキ　空シキ
明ケキ　遥ケキ　靜ケキ　平ケキ　豐ケキ
寒ケキ　爽ケキ　安ケキ　長閑ケキ

又外ニ一種アリ即チ動詞ヨリ轉シテ此（二）種ニ入レルモノ是ナリ此等ハ皆動詞本來ノ語尾變化スル所ヨリ之ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

願ハシキ　歎カハシキ　賴モシキ　好マシキ
羨マシキ　痛マシキ　喜ハシキ　混ハシキ

又「マシキ」「カマシキ」「ヲシキ」等ノ語尾モ亦總テ之ヲ寫シテ送假名トス

（第二）他種ノ詞ヲ履ム形容詞　他種ノ詞ヲ履ム形容語尾ニ九種アリ（一）「ナル」（二）「タル」（三）「ケル」（四）「セル」（五）「テル」（六）「ヘル」（七）「メル」（八）「レル」（九）「ノ」トスヲ履ムモノ是ナリ此等九種共ニ其語尾ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

（一）
靜ナル　明ナル　平ナル　速ナル
愚ナル　朗ナル　緩ナル　暖ナル
誠ナル　健ナル　詳ナル　鮮ナル

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

盛ナル　稀ナル　專ナル　斜ナル
斑ナル　圓ナル　疎ナル　細ナル

此「ナル」ノ語尾ハ漢語ニ附セラルヽコトアリ其例左ノ如シ

美麗ナル　寛大ナル　有名ナル　高尙ナル
卑劣ナル　貴重ナル　簡短ナル　温順ナル
殘忍ナル　壯大ナル

(二)
過ギタル　朽チタル　老イタル　舊リタル
枯レタル　肥エタル　錆タル　重リタル
立テタル　積キタル　曲リタル　乾キタル
濕リタル　錆ヒタル　破レタル

此「タル」ヲ履ム形容詞ハ皆動詞ノ連動言即チ四段活用、ラ行變格、中二段活用、一段活用及三段活用ノ詞ハ五十連音ノ(イ)ノ横行ヨリ變化シ又下二段活用ノ詞ハ(エ)ノ横行ヨリ變化スルモノナルカ故ニ今形容ヲ成スニ方リテモ動詞本來ノ送假名附法ニ從ヒ右例ニ示セルカ如ク動詞語尾ノ變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス(動詞ノ條ヲ參看スヘシ)

又此「タル」ノ語尾モ亦漢語ニ附セラルヽコトアリ其例左ノ如シ

確平タル　儼然タル　紛紜タル　渺茫タル
錚々タル　堂々タル　漫々タル　寂寞タル
判然タル　漠然タル

(三)(畫ケル)　貫ケル　琢ケル　焼ケル
(四)(寫セル)　增セル　鍊セル
(五)(立テル)　穿テル　滿テル　鎖セル
(六)(浮ベル)　漂ヘル　狂ヘル　整ヘル
(七)(沈メル)　包メル　富メル　病メル
(八)(曲レル)　反レル　懸レル　撚レル

(九)
(イ)種々ノ風説　色々ノ花　夥多ノ貨物
百般ノ事
(ロ)露ノ命　夢ノ浮世　花ノ顏　月ノ眉

右「ノ」ナル語尾ニ二意アリ一即チ(イ)ハ助動詞ノ「ナル」ト同義ナルモノニシテ一即チ(ロ)ハ「如ク」トノ意ニ解スル所ノ「ノ」是ナリ

(第三)指示形容詞　指示形容詞トハ事物ノ位置關係ヲ指示スルモノニシテ「コノ」「ソノ」「カノ」ノ三詞アルノミ若シ漢字ニテ之ヲ寫ストキハ共ニ送假名ヲ附セス其例

左ノ如シ

此世　此國　此時　此身

其人　其家　其價　其事

彼地　彼書　彼言　彼物

但シ右三詞ハ便宜全ク假名ニテ寫スコトアルヘシ

(第四)數形容詞　數形容詞ハ基數、序數共ニ語尾變化セス故ニ送假名ノ附スヘキナシ其例左ノ如シ

四十七士　十六羅漢　二十五菩薩　三十二相

四書　五經　四季　八景

第一條　第二疑　第三卷　第四號

一ヨリ九ニ至ル數形容詞ニシテ音訓兩讀ノモノヲ特ニ訓讀セシムルトキハ便宜(ツ)等ノ語尾ヲ寫シテ送假名トスルコトアルヘシ

(第五)合成形容詞　合成形容詞トハ二語以上連合シテ形容詞ト成レルモノヲ謂フ此等ノ形容詞ハ唯其下ニ連リタル詞ノ語尾ヲ寫シテ送假名トス其例左ノ如シ

薄暗キ　細長キ　青白キ　手輕キ

待遠キ　心易キ　意地惡キ　見苦シキ

輕々シキ　苦々シキ　手重ナル　重立チタル

年古リタル　氣強ナル　足弱ナル

○動詞

凡ソ動詞ニ四種アリ(第一)本然動詞(第二)延長動詞(第三)短縮動詞(第四)合成動詞是ナリ

右四種ノ動詞ノ送假名法ハ左ノ如シ

第十則　本然動詞ハ總テ其語尾ニ變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス但シ同字異樣ノ訓義アルモノニシテ其語尾同一ナルトキハ便宜一字ヲ増附シテ送假名トス

第十一則　延、縮兩種ノ動詞ハ延ビタルモ縮リタルモ共ニ其語尾ヲ寫シテ送假名トス

第十二則　合成動詞ハ總テ下ニ連リタル詞ノ語尾ノ變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス

(釋例)

(第一)本然動詞　本然動詞ニ五種アリ(一)四段活用(二)三段活用(三)中二段活用(四)下二段活用(五)一段活用トス五種共ニ其語尾ノ變化スル所ヨリ寫シテ送假名トス左ニ各種活用ノ法ヲ示シテ以テ送假名ノ附法ヲ知ラシム

(一)四段活用　四段活用ノ動詞ハ五十連音ノ横行「ア」

「イ」「ウ」「エ」ノ四段ニ轉シテ變化シ其縱行ハ「カ」「サ」「タ」「ハ」「マ」「ラ」ノ六行ニ限ルモノナリ其例左ノ如シ

	將然言	連動言	終止言 連名言	既然言 使令言
カ行	行カン	行キ	行ク	行ケ
	聞カン	聞キ	聞ク	聞ケ
サ行	爲サン	爲シ	爲ス	爲セ
	移サン	移シ	移ス	移セ
タ行	待タン	待チ	待ツ	待テ
	穿タン	穿チ	穿ツ	穿テ
ハ行	問ハン	問ヒ	問フ	問ヘ
	願ハン	願ヒ	願フ	願ヘ
マ行	摘マン	摘ミ	摘ム	摘メ
	頼マン	頼ミ	頼ム	頼メ
ラ行	折ラン	折リ	折ル	折レ
	祈ラン	祈リ	祈ル	祈レ

此四段活用ニ屬スルモノ甚タ多クシテ動詞總數ノ八九分ハ此活用ノ詞ナリト謂フモ不可ナキカ如シ

此四段活用ニ屬スル二種ノ變格アリ一ヲ「ラ」行變格ト云ヒ一ヲ「ナ」行變格ト云フ

「ラ」行變格　「ラ」行變格ニ屬スル動詞ハ唯有リノ一詞アルノミニシテ其大體ノ活用ハ尋常四段活用ニ異ナルコトナシト雖モ其他詞ト續ク樣ノ相同シカラサルヨリシテ變格ノ名ヲ得タリ即チ尋常四段活用ニ於テハ第三段即チ「ウ」ノ横行ハ終止言ト連名言トヲ兼テ第二段即チ「イ」ノ横行ハ全ク連動言ナリ然ルニ此「ラ」行變格ニ於テハ第二段即チ「イ」ノ横行ハ連動終止ノ兩言ヲ兼テ第三段ハ專ラ連名言ナリ左ニ示ス所終以テ之ヲ知レ

將然言	連動言 終止言	連名言	既然言 使令言
有ラン	有リ	有ル	有レ

此有リト云フ詞ハ他ノ詞ト合シテ種々ノ助動詞ヲ成スモノニシテ其活用極テ廣大ナリ尚ホ委シキ事ハ下ノ短縮動詞ノ條ニ於テ言フヘシ

又此有リト云フ詞ハ諸他ノ四段活用ノ「ラ行」ニ屬スル者ト同シク「アラン」「アリ」「アル」「アレ」ト「ラ」「リ」「ル」「レ」ニ變化シテ「ア」ノ音ハ動カサルヲ以テ有ラン、有リ、有ル、有レト有ナル漢字ニ「ラ」「リ」「ル」「レ」ノ仮名ヲ附シテ送仮名トスヘキナレトモ世用ノ習慣ニ依リ茲ニハ全ク仮名ニテ之ヲ寫シ即チ左

ノ如シ

アラン　アリ　アル　アレ

（附言）居ラン　居リ　居ル　居レ　ト活ク詞ハ先人皆之ヲ「ラ」行變格ニ入レタリ然レトモ今其活語ノ現用ヲ察スルニ全ク尋常ノ四段活用ニ異ナル所ナク且ツ其語調ノ四段活用ニ屬セシムル方遙ニ圓滑ナルヲ覺ユ故ニ茲ニモ之ヲ「ラ」行變格ニ入レスシテ尋常ノ四段活用ニ屬セシメタリ

「ナ」行變格　「ナ」行變格ハ往ヌ、死ヌノ二詞ニ限リ將然言、連動言、終止言、連名言、既然言及使令言（希求言）孰モ其語尾ヲ變化スルモノナリ即チ左ノ如シ

將然言	連動言	終止言	連名言	既然言	使令言（希求）言
往ナン	往ニ	往ヌ	往ヌル	往ヌレ	往ネ
死ナン	死ニ	死ヌ	死ヌル	死ヌレ	死ネ

（二）三段活用　三段活用ハ縦行ハ「カ」「サ」ノ二行ニ限リ而シテ其横行ハ各々異ニシテ「カ」行ニ屬スルモノハ「コ」「キ」「ク」ノ三段ニ活キ「サ」行ニ屬スルモノハ「セ」「シ」「ス」ノ三段ニ渉クモノナリ即チ左ノ如シ

	將然言 使令言	連動言	終止言	連名言	既然言
カ行	來	來	來	來ル	來レ
サ行	爲	爲	爲	爲ル	爲レ

此三段活用ノ詞ハ右ニ擧ケタルヨリ外ニハアラス且ツ來ノ字ノ如キハ之ヲ　コ　キ　クル　クレ　ト三段ニ活シテ用フルハ今日ニ在リテハ唯雅言ト俗言トニ限ルモノトナリテ尋常ノ文章ニハ皆之ヲ浩シテ　來ラン　來リ　來ル　來レ　ト四段ノ活用ト爲スニ至リタリ

又　爲　爲　爲ル　爲レ　ト云フ詞ハ有リト謂フ詞ト同シク他言ト合シテ其意ヲ活カシムルモノニテ其用甚タ廣シ但シ有リト同シク仮名ニテ　セ　シ　ス　スル　スレ　ト寫ス其例左ノ如シ

船出セン	船出シ	船出ス	船出スル	船出スレ
物語セン	物語シ	物語ス	物語スル	物語スレ

又漢語ヲ其儘ニ用フルトキハ皆此　セ　シ　スル　スレ　ノ活詞ヲ加ヘテ之ヲ活用ス其例左ノ如シ

製セン	製シ	製ス	製スル	製スレ
感セン	感シ	感ス	感スル	感スレ
論セン	論シ	論ス	論スル	論スレ
決定セン	決定シ	決定ス	決定スル	決定スレ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

陳述セン　陳述シ　陳述ス　陳述スル　陳述スレ

（三）中二段活用　中二段活用ハ横行「イ」「ウ」ノ二段ニ活キ縱行ハ「カ」「タ」「ハ」「マ」「ヤ」「ラ」ノ六行ニ限ル其例左ノ如シ

	將然言、使令言、運動言	終止言	連名言	既然言
カ行	盡キ	盡ク	盡クル	盡クレ
	過キ	過ク	過クル	過クレ
タ行	朽チ	朽ツ	朽ツル	朽ツレ
	耻チ	耻ツ	耻ツル	耻ツレ
ハ行	強ヒ	強フ	強フル	強フレ
	媚ヒ	媚フ	媚フル	媚フレ
マ行	恨ミ	恨ム	恨ムル	恨ムレ
	怨ミ	怨ム	怨ムル	怨ムレ
ヤ行	老イ	老ユ	老ユル	老ユレ
	悔イ	悔ユ	悔ユル	悔ユレ
ラ行	懲リ	懲ル	懲ルヽ	懲ルレ
	下リ	下ル	下ルヽ	下ルレ

此中二段活用ニ屬スル動詞ハ　數多カラスシテ此ニ擧ケタルモノヽ外ニハ起ク　生ク　落ツ　墜ツ　紅葉ツ　延フ　愁フ　生フ　戀フ　聾フ　錆フ　亡フ　滅フ　浴フ　報ユ　臥ユ　舊ル　等ノ數語アルノミ

（四）下二段活用下二段活用ハ横行「ウ」「エ」ノ二段ニ活キ縱行ハ「ア」ヨリ「ワ」ニ至ル十行ニ行ルモノニシテ四段活用ニ次キテ其數甚タ多シ其例左ノ如シ

	將然言、使令言、運動言	終止言	連名言	既然言
ア行	得	得	得ル	得レ
カ行	告ケ	告ク	告クル	告クレ
	受ケ	受ク	受クル	受クレ

（以下次號）

函谷關どころか。——「先生、旅には珍らしいものが有りますねエ」。

「さうさ、何が珍らしいね」。

「なに、私が亞米利加の内地を旅行致しました時に恐ろしく鷄の啼聲の上手な男を見まして」。

「それで何うしたね」。

「斯うです、その男の鷄の啼聲のうまいこと、云ッたら大變です。いつでもこの男が啼聲を立てると夜中でも御天陽さまが直に出て來ました」。

小説

麹亭飯人

鶯燕

第六回　忌はしき新聞の雑報

十二疊の座席に、五六脚の文机、西洋燈は光を韜んで炭籠の後に隱れ、蝙蝠傘は翼を戢めて書函の隅に潜み、鉛筆と楊子と同居すれば、齒磨と石鹸と隣合なり、毛氈の座滿團は夜着に通用するを以て便利に、赤楊の烟草盆は枕の代理をなすに因つて重寶なり。されど机の左手には、まだ新らしき法律雑誌いと古びたる刑法治罪法等、何くれとなく積み重ねたる其中に、一際目に立つは洋仕立に金字入の美本、それハ近頃評判の伊藤伯が憲法義解なりけり。知らず何人の住居ぞ、淺草西鳥越なる巡査の合宿所にぞある。非番の巡査にや、二三人打ち集ひて、各新聞を讀で居り、

□「女學校の醜聞も久しいもンだねえ」。

△「さうさ」。

○「讀んで居ても腹が立つ、君方は兎も角も、僕の兄弟のやうにして居る柳川が關係して居るから」。

△「そりや僕等だッて同感さ、しかし柳川も餘りぢやないか彼の書翰は別に差出人が有つて、細君に不都合ない事が判然してるといふものを、彼の此のと」。

○「さう一概にも云へないて、柳川のいふ處に據れば、細君も又良くないよ、といふのは細君の往て居る駿河臺の宣教師、それぞそら、先頃青山伯爵の夫人と妙な風評のあつたらう、然るに又其の宣教師の夫人は、神田の麗綉學校の教師で、近頃は其の生徒の爲に、媒妁の勞を取るとかいふ噂のある處へ、柳川の細君ハ非常に其の夫人を信仰して、毎日通ふのみならず、時としては麗綉學校へも同伴する事ぞあるといふぢや無いか、それを柳川は時々やかましく云へど、細君は中々聞き入れず、柳川も些鬱悒として居た處へ、例の書翰を拾つたので、到頭こんな騒ぎに成つたのさ。

○「さうさう、實に非常な書き方だ、しかし新聞も輕忽は信ぜられんよ、△君は御覧かえ、其の鶯燕の縫ものと見出しのある處と」。

△「今讀みかけた處だが、『吾が褄ならで褄は重ねじとは男女同權を知らぬ頑固時代の事、今は顔世も中々開化してそんな野暮ハ囈語にも云はず、氣に入つた師直へは此方か

らの艶書三昧、淺草の淺き心は露ほども、なく鳥越えの戀の山、ぬしを思へば日は已に、西片町の片おもひ、など、古風に氣取らずして、ブッと高尚（でもあるまい）に美術的の作用で、鶯鷰の縫ものに幾久しくの數文字は、情あり色ある隱語隱語を解いた師直、判官を見て面ふくらし、鮒ちや鮒ぢや鮒男ぢやとは、何處の演劇の筋書きか、さつてもさつても新奇、新奇』。これは酷い、柳川を鮒男とは實に酷い云ひ分だ、眞に新聞は輕忽して讀めないねえ、現在同各異人といふ事が分つて居るものを」。

○「處が未だ判然しないのさ、其の同名だといふ築地の豪商の女は、麗績學校の生徒でもあり、且春山とは師弟の間柄でもあるから、學校でも百方二人の身の上に付いて穿鑿したさうだが、二人の身の上には更に其の形跡が見えず、又實際その女には關係ない事の樣子、して見ると疑念は如何しても柳川の細君に掛らなければならないから」。……

△「それも然だ」。

□「が、如何も不思議な事だ」。

折しも「失敬」といひつゝ、間の襖子を開けて入り來るは是れ別人ならず、則ち柳川翠なり。

○「いや、今君の噂して居た處だつた、まあ此席へ來たまへ」。

座蒲團にせし毛氈を推し廣げて、共に座わり直しながら、

△「時に君、例の一件は如何したの」。

「如何したも如此したも仕樣がないのさ」。

□「仕樣無い事は無からう、何んとかして早く定限付けたまへ」。

「定限付けるの付けないのといふ譯ぢやないが、種々入り組ンで居つて中々面倒だよ、妻の親が來て話すには、艶書の差出人は同名異人で、決して女の業ぢやない、疑はしくは聞いて見ろと云ふから、內々探つて見ると、成程同名の者が有るに相違ないが、それが果して艶書の主だか如何だか、判然しかねる處へ、此の頃の諸新聞での風評だらう、それで僕も躊躇して居るのさ」。

○「成程、ぢや事の判然して細君に罪が無くば、戻すつもりだらうね」。

「それは戻さない事も無からうが、しかし如此に評判も立ち、且僕も一旦出す積りで出したのだから、まあ覺悟めて

るのさ、只あまり世間で噂ましくいふので、役柄にされる事は些からかで、其れが案じられてならんよ」。
△「それは大丈夫さ、今般の事は所長も大層氣の毒に思つて居られる樣子だから」。
「さうかえ、ぢや先づ安心だが、實は今日それを聞きに來たのさ、妻の事はまあ如何でも可いよ、それはさうと麗絵學校の教師も生徒も退校したぢや無いか」。
△「さう、今日の新聞にはまだ見えて居らんやうだよ」。
「見えてるよ、其の日々を見たまへ……寸鐵人を殺すといふ條を」。
□「寸鐵人を殺そ——『艶聞といへば艶やかに、醜聞と云へば醜くし、されば艶は醜の極、醜は艶の極を悟を開きし或女學校には、其の艶の極生徒は退校し、その醜の極教師ハ辭職しぬ、かく艶醜相破裂して更に或細君を傷つけたりそも原因ハ何ンぞ、只是れ一個の鴛鴦、而も縫とられたる一個の鴛鴦、生きて二人に仇を爲す、寸鐵人を殺すをハ當れる許か、但しは否か』。……成程、これで見れば君の細君に咎のないこともいよ／＼明瞭だ、或細君を傷つけたり云々で」。

○「左樣さ、成るべくならば戻す方が可いよ、君の細君の樣な容貌もよく、仕事も出來るといふのハ實に得がたいから」。
△「眞に爾だ、しかし今回の事件には御察し申すよ」。
同僚の心安さに、別け隔ての遠慮も入らず、團欒あつて話し合ひつゝ、日影の移るも知らざりけり。

ても綿密な——ある人が翌日の朝五時に起してくれろと下女に云附けると、下女は三時に起してくれました。「まだ早いのに」と主人がすこし怒りかけると下女は更にわからぬ氣色で、「はイ後二時間御休みでも宜しいと申上げやうと存じまして」。

批評

國民の友のおもかげ

珍らしい萬能の「はえじい」も有れば有るもの、英獨和漢の古典を思ふまゝに爲された手際、まづそれだけでも近頃の御苦辛を敬服してもいゝのです。評者は近頃にはかに文壇で許多の敵を引受けるやうに爲られた才子、平生いだかれる主義も評者と大同小異、評者とはまた未見の友でも無い、そ

の誼といふも愚かなこと、いづれ世間の批評もかれ是ありましやうが、まづ信ずるだけを打明けて思ふまゝに評をして見ましやう。

原詩の譯し方を四種に分け、原の意義に從ふもの（意）と、原の意義と字句とに從ふもの（句）と、原の意義と韻法とに從ふもの（韻）と、原の意義と字句と平仄韻法とに從ふもの（調）と、それ〴〵經營の勞を取られたのは兎に角明治以來これが始めて。（意）で譯すさへ難いのに、まして（句）で譯して。（句）で譯すさへ難いのに、まして（韻）で譯して。（韻）で許してさへ難いのに、まして（調）で譯して。たとひその譯し方は些し下手にしろ、是だけの譯者の大膽を思へばまづ其点に於て充分に褒めなければなりません。

つく〴〵思へば一時大學の人たちが新体侍と云ふ物を唱へ出されてから爰に五六年、その以來一二この事に志を傾ける人が有るだけ、まだ一つとして詩といふものゝ出た事の無かつた、否、完全と許せるほどの譯した物さへ無かつた、その處へ馬頭の米嚢が思ひの外兎に角見えました。

而もかげに於ては譯し方が意、句、韻、及び調の四つに分かれて居ます。　そして難易の度を言へば意は句より、句は韻より、そして韻は調よりやさしいです。　そして意の範圍は只原詩の意義を譯したといふ處にあるからには、この種類を許するには充分その句法が耳に立たず、而も西洋の臭味を脱して、全く日本人の思想で出來た物と見えるのが宜い、で無いのは惡いと判斷を付けてもいゝのです。

「句」に於ては原作の意義幷びに句法まで譯したと云はれたからには是には原作の泰西風の句法が正に有るかどうかを許して宜しいです。

「韻」に於ては一歩進んで押韻をしながら原作の意義を取つた物ゆゑ、是にはその押韵の適不適及び意義の足不足を考へ、そして句法の泰西風であるのをばあながち穿鑿せずともいゝのです。

「調」に於ては譯者が最も苦辛されたらしい物で、言はゞ譯詩の正体ですから、一切容赦なく許しても宜しいのです。

以上四種ながらそれ〴〵評點が違ひます。　是からの評の基礎ゆゑ、煩ながら右の四評點を更に括れば左の通りです。

「意」　意義のみを取つた作、云ひ換へれば原詩の意義が日本人の心に入つてそれから詩に現れたもの、それ故に原詩の意義を失はぬ以上は其意義を云現す口調が大和振りであるか

どうかを見て、そして其他をば一切顧みぬ事、これがこの（意）に屬する譯詩の評の眼目。「もし意義を現す口調が大和換であれば其作は難の無いもの、これが評の決斷。

（句）意義の外に句法をも取つた作、それ故にこの方では口調が原詩を離れぬのを尙ぶ、これがこの種の評の眼目。もし口調が原詩を離れぬなら其作は難の無いもの、これが評の決斷。

（韻）意義と韻法とを取つた作、それ故にこの方では押韻の適不適を言ふに止まる、これがこの種の評の眼目。もし押韻が不完全で無ければ其作は難の無いもの、是が評の決斷。

（調）意義、字句、平仄韻法、すべて取つた作、それ故にこの方では原詩の意義を備へ、字句を移し、平仄韻法をあやまらぬを尙ぶ、これがこの種の評の眼目。もしこの三ヶ條の中其一でも欠かなかつたなら其作は難の無いもの、これが評の決斷。

おもかげを譯するに方り、まづ是だけの注意を施し、その注意が多く誤まつて居ぬと假定めれば評者は是を土臺とし、其の最もたやすい物、即ち第一、意、第二、句、第三、韻、及び第四、調と順々に評して行つても宜しいのです。下手の長談義、或は長く號を重ねるかも知れません。それだけは御容赦を願ひます。

譯譯を許するのと著述を許するのと評体は是非ともちがふ譯、またその難易もちがふ譯、したがつて譯者を責める段に於ても無論ちがふ譯です。

（意）その答全十七曲の中に「意」は七八を占めて居ます。總括して之を許するのに、漢詩に譯された方が歌のより一步劣つて居ます。漢詩の秀逸は「鬼界嶋」、しかし無駄に句を埋めた、否、しまりの緩い句が多いのをば免かれません。「野梅」に比べれば「別離」の方がまだしも。しかし一讀して味の有ると云ふ處までは迚も行きません。情致の有る點から撰べば「鬼界嶋」など可ありです。が、情致風姿ともに備はつた「花さうび」、「わかれかね」、「わが星」などにどうして及びましやう。

「意」に屬する物の中で屈指とあるべきは「あまをとめ」、「花さうび」、「わかれかね」、「わが星」の四種で、その中で一番劣つて居るのは「あまをとめ」です。「あまをとそ」の第六句の「かしらをば」の「をば」は都々一で言ふ例の「をば延ばし」です。その結末、「こゝらの玉もしづみ

つゝ」には誤字が有るやうに見えますが、如何でしやう。

「花さうび」、絶調、一分も透間は有りません。これと「わかれかね」ばかりは翻譯とは見えぬほど筆が伸びて、讀んだばかりでも美しい感は起ります。「わがうへよしも」およびその次の「おどかくれつる」など珍らしい、巧みな言葉の配り方です。

「わかれかね」、これも前の「花さうび」に肩をならべる筆行きです。うるはしいと云ふより外に評は入りません。

次に「わが星」、これも惡くは有りません。が、前二種に比べればはなはだ推敲が欠けて居ます。初句「おもひとかけし」この言葉が非常に耳に立ちます。「おもひ」といふ言葉は元來情の深い言葉、しかしその情の深さは含蓄されて居る言葉。その奥床しいところを「かけし」と云ひ破られたのは遺憾です。意味の無理に烈しいところには是でも宜しいでしやう。「わが星」の原著者の感情は果たして烈しく動いてあつたのでしやうが、それとも深く靜にもよはしてあつたのでしやうか。「草木立何をやさしくそよぐ」といひ、「大空何をやさしく見下す」といふ語氣は迚も烈しい感情から來たのでは有りません。いはゆる此者目は誰やらが云

つた「剛を受ける柔の感」です、決して「剛を受ける別の感」または「柔を受ける剛の感」では有りません。そこへ烈しい語氣を出されたのは、それ故に、失策でした。「白鵜鳥の羽裏を照す山おろし」。との「照す」は動かぬ言葉、「たとひ「山おろし」はいかめしい言葉でも。それと「おもひをかけし」は同じ類です。

「心もそら」から結末までは無雙の句意味は實によく現はれました。

（未完）

清淨な──「權助、御前なぜ肥をかけると作物がよく出來るのか知つて居るかね」。

「そりやア私の知らねェで……」

「知つて居るか」。

「知つてるこんで」。

「そういふ譯だえ」。

「あにさ、肥は臭エだ、作物は清淨だもさ。清淨あるもんだアから臭エの否がつて成るたけ肥さ遠くあるやうによつて早く伸びるんだ」。

雜纂

音樂大家モザート氏の傳（前號のつゞき）

夢の屋口授　みさ子筆記

丁度此時に當つて音樂の大家なるボーノー、ペッシ、メタスタシノ、フランカザー侯等が順々に我家にて音樂の小會を催したり。成る此の小會にモザートの父來りて何卒私の悴モザートにゼルマン或ひはイタリーの能きメロジーを撰びて和聲とつけしめてよと頼みければ皆々夫は甚た面白き事ならんも是等の人人ゼルマン或はイタリーの能きメロジーを撰びてモザートに能へたり。故にモザートは是に和聲をつけて出したりしにモザートの事故以前の如く是れを滿足に作り大に人々の感賞を得たり。此頃マジイシ付きの寺の開眼式あり。此時モザートは頼まれてマッス、モテット等の曲を新に作り、又其上其日の音樂士の奏する音樂の樂長となりて音樂を指揮しけり。實に子供の業に似合しからざる事あり。然れどもモザートは此の如き場合は此時のみに非ずして以前にも此の如き事しばしばありたりとぞ、是れを以て見れば此の音樂の樂長に頼まれしも奇とするに足らず。モザートは千七百六十九年十二月に其父と共にイタリーへ出立したり。未イタリーにおもむかざる前にサルスボルグアーチビショークといふ者モザートにフィヘイ堂の樂長となるべき旨を頼たり。此時代には音樂に秀でたる音樂士多くありたるに是等の者を除て此小童なるモザートにかゝる大業を頼むを以て見ればモザートの音樂にたけたる事判然せり。凡人は此の如き場合に於ては必ず喜んで是れを承諾すべしと雖もモザートは是等の事に意を加へず猶諸國遊歷なさんとの心ぐみなるを以て是れを斷りてイタリーへ遊歷にぞ行きける。然るに丁度其途中にてイタリーのミランと云る所の知事カウントワヒルミヤンと云ふ者の家にてモザートは例の通り已れの樂を奏したるにモザートの事故平常の如く甚だ巧に彈じたりし故に此知事大に感じ、モザートに此の地に永く留りて他國へ遊歷する事を留むると雖もモザートは是れを聞入れずして其知事に向て曰、千七百七十一年のカーラパルの祭日に當れる日には再び此地に戻り、樂を奏せんと欲する故に只今は直に暇を戴きて遊歷すべしとて此地を出立したり。此遊歷中ホルングナーと云へる處にて當時「パイナリン」に大家なるマロチナイ氏を始として諸々の音樂士モザートの此の地に來りたるを聞き皆爭ひ行きてモザートの

樂を奏するを聽聞したり。此時モザートは最も困難なるヒユーギコーを精やかに奏したるを以て人々大に感じ驚けりと。又フローレンスにても自れが業を彈じて大に喝采を得たり。此のフローレンスに滯留せし間モザートは一人の親友を得たり。此者の名はトーマスリントーといへる者にて此人もフローレンスのバイオリンの大家にしてマルチナイ氏の弟子にしてモザートの如き者と交りをなす者なれば、何れ常人には非ざる事は論を待たず。故にトーマスリントーもモザートと同年齡なれども師匠に劣らざる藝を有したり。夫故にモザートも深く交りて親密の友となり、モザートがフローレンを出立せし時、トーマスリントーは餞別の記として一の曲をうつし、是をモザートに贈たり。此曲はトーマス一人にて作りたる物に非ずして音樂の大家なるユリンナト云へる者に一の曲を製する事を賴み、是を己うつしてモザートに贈りたるにて、實に愛情を現したる物なり。モザートの出立する日に當つて此のトーマスもモザートを町はづれ迄送、モザートののり物にすがりて大に別れををしみ涙にむせび正体なかりしと。此時ローマに行きしに丁度其時はパッシヨンウイーキといふヤソの祭日にあたりたるを以て父と共に水曜日の夕よりシスメインシヤペルに行き、其祭にのぞみしに折能く此所にても祭を行ひたる物と見え樂を奏せり。此の曲は甚だ秘曲なるミツセレエーの一曲にして此の曲はパツシヨンウオイギに關したる者に非ざれば其の樂の符をうつし、又は其の符を見る事を得ず。若しひそかに是れをうつし世間に廣むる時は宗旨破斷と同罪にせられて宗旨中より此の者を逐ひ出すを法とせり。モザートは少しも是れを知らずして音樂を好、且たけたる者なれば其曲を充分細かに聞き、家に歸りて記憶する所の物を書き記したり。次ぎの日(金曜日)に亦此曲の催あるとを聞き、再び行きて此曲を聞き居たり。此の時には已れの前に記しをきたる符面を帽子の内に入れ置き、曲を聽聞しながら其ちがひを正したり。此の事誰云ふとなく世間に傳はり、皆〻此曲をうつしたる事をいきどほり、或は又是を感ずる者もありて最早曲をうつしたる以上は是れを罪するも仕方なし寧モザートを呼び、其力を試み聞くこそ能からんとモザートを呼び出し、夫の曲を聞きしに、其當日は此のパッシヨンウイーキの音樂士なるクリストホーライと云へる者もモザートの業を聞きに來たりしにモザートハ此のホーライの多年來練習したる如く實に巧に是を奏し終りたれは皆〻驚き感ぜしと。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人の記者

最近米國出版の新聞雜誌及び新聞雜誌記者及び著述家一覽を讀めば一年ごとに婦人文學者の殖えて行くのがわかります。婦人の職業とすべきものは中々ある、その中でも文學は矢張り婦人の天性から大して縁の遠いものでも無い、すなはち婦人には文學も相當するとの說の輿論となつた證據には――政治上の新聞雜誌及び著述は兎に角――その餘の新聞雜誌及び著述に婦人の名を見せぬのは殆んど少なくありました。

學校で高尙な文學を修め、それから敎師になり、または退いて實業に就く米國婦人は實に多數なものです。ある米國の老貴婦人がにういんぐらんど婦人著述會に臨んで非常におどろき、「妾が若かつた時までは婦人記者の少ないのは白烏とおなじことであッた」と云ッたのも無理では有りません。現にこの婦人著述會には七十八人の會員が有つて、その會員はいづれも夫人と令孃で、しかも大抵は有名な人のみでそ。

それでこの勢で年々殖えては行く樣子ですが、只なげかはしい事はまだ婦人文學者の力が一般世の男子に承認されぬことで、それ故に相應の地位を得て婦人が社會に向つて實際筆を取るのはまだ難いと云つても宜い程です。　まつせちゆせッと日々新聞の持主なども婦人記者の力は男子記者の十分の一だと云ッて居ます。そして婦人は考が綿密に行亘るのは男子の及ばぬ處、しかしその考の綿密なのに任せて入らぬところまで手を出し、消費を多く立てる事もあり、また婦人は最も競爭心に富むものゆゑ、それを程よくして置けば宜いのに、さうでなくて或は荒々しく男子と頡抗し、一つ世の名譽を受けたいなど、望む極、終には筆を曲げるやうな事が有ッていけない。大抵の人は斯う云ふのです。

價格を云へば婦人記者の方が男子記者より廉い賃金でやとはれます。併し、可なり世に馴れて居る事業家さへ前のやうに考へて居ることゆゑ、數のわりには婦人文學者が一己で主筆となッて居るのは少ない方で、その餘は多く寄書家、または特別寄書家で、これだけの處ではほとんど男子を壓倒するくらゐの勢で、今日の處米國の新聞雜誌に男子のよりは婦人の詩や文章が多く載つて居るのも其故でそ。

たゞ不思儀なのは米國の社會が婦人の文學には男子のより不德の分子が少ないといふことを承認せぬ事です。勿論社交上の混入ッたところもあり、彼是婦人が却ッて男子より不德である形迹も米國などでは無くもない、そのために幾らか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

冷淡に考へても居るのでしやうが、しかし實の所それは少數で、やはり精密に言へば一般に男子の文學には婦人のによりも不徳の分子が多いものです。是は男女兩性上、一は廉耻を心で生み、一は廉耻を心に受ける、その邊から相違する譯で決して不思議では有りません。既にかうとすれば、實は社會のため樂しんで婬せぬといふやうな文學が行はれるやうにするには婦人の文學を奬勵することで、多少婦人が筆を曲げて男子と爭ふことが有ッたにしろ、それで婦人を排斥するほどの弊害が出るとは言はれません。

口の説

米國ちやアち女史述

顔の道具の中もつとも感情をあらはすものは口で、顔の美をなすのもまた醜をつくるのも専ら口に有ります。あまり大きいのも、殊更婦人には、荒々しく見えますが、さうかとて小さ過ぎるのも扣鈕の穴と言はれて好ましくも有りません。

きゆうぴッどの弓（きゆうぴッどは希臘の神の名、戀愛を司る神。このきゆうぴッどは弓を持ッて居て、その弓は丁度〳〵の形をして居ます）は極美の口の形を見せたもので、その緊り方の佳さ、古歌に「蜂が來て今吸ッたらしい」といふ、それです。

うるはしい目や、奇麗な毛を持つ人はいくらも有りますが極美の口を持つ人は罕です、目や毛で顔を許するのは實はまだ野蠻な鑑識なので、高等の美心を持つ人はまづ顔の批評の重なところを口に置きます。

それで、薄くて曲折の少ない唇は惡心を示すもので、あまり脹れたのは婬邪の性を帶びたのです。唇の左右の隅がすこし上へあがつたのは快活な氣象を示し、下へさがつたのは意地わるさを見せます。唇の直側に寄る笑窪は非常に愛らしさを添へ、上唇がやはらかく反るのも大層な情致になります。舌や歯でわれとわが唇を吸ひしぼりまたは嚙むのは唇の美くしさをいつか知らず〳〵の間に損じるもので、ぱんばどうる夫人もそのやうな事をしたため自分の唇は卅歳にならぬ前に醜くなつたと言ひました。赤子の唇に醜いのが多いのは全くこの故で、これらの唇はまだ柔かいところを、歯のないためすべて何でも食物を唇で取りあつかふ、それでをかしな形になるのです。

それのみか唇を嚙むと唇の皮をあらびさせます。この皮の荒びを治すは夜寢る前リスリンを塗るのに限ります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

これまでは婦人の口について言ひましたが、男子の口は小さいよりはむしろ大きい方が望ましいです。男子の口が小さ過ぎるのは女めいて却って見よくないです。唯ゞ男子の口ばかりか、女の口もわるく小さいのは見よくも無くて、むかしの詩人が婦人の口を賛めて「花の莟」と云ったのはむしろ今日では子供にのみ求めるやうな流行になりました。

過度に笑ふのは口の美を損ずるもので、ほとんど笑ひ出しさうなところ、すなはち微笑は却って品のいゝものです。そして過度に笑ふのは折角笑ったゞけの愉快を人に與へるものでありませんが、唯微笑はいつでもいゝ感じを相手に受けさせる物です。

實に笑ひ方は中々むづかしいもので、而も最も考へていゝ事です。　ある文學者が最美の笑ひ方を斯う決めました。――頬にすこし笑窪が入って、口はほとんど開かず、わづかに上の前歯がすこし洩れて見えるくらゐ」。

ぽかんと開いた口は――田舎者がよく爲る――非常に顔を馬鹿氣させます。　そして貞操無さうに見えるものです。

歯を奇麗にするのも口の美を添へる第一の原因です。　色々世の中に効能の立派に書立てゝある歯磨が有りますが、いづれも強い酸性を持つもの故、歯のためには非常な毒。よく世の人がよささうに云ふレモンとゴムとで磨く法もやはり好いことではありません。

また夜寝る時熟したイチゴを噛むと、歯にうるはしい艶が付いて而も口中に大層いゝ香ひがするとて婦人の中にはこれをする人も有りますが、是もやはり歯のためには毒です。

それより何より口中の臭味を去るのはクロレート、オブ、ポッタシを二ドラム、之を六オンスの薔薇水に交ぜ、その水で口を漱ぐにかぎります。

こゝに注意すべきことは木炭です。　呼吸の臭味を去るのに非常な力を持つのみか、猶歯を丈夫にし、白くし、汚穢を去り、歯痛を防ぎ、そして歯基や唇の色を美しくさへします。小さな小刀の尖で一掬ほどの炭の粉を寝る前に歯の根へすりこんで置き、朝みがき落とすが歯のためまことに宜しい事です。　炭は植物の炭なら大抵何でも宜しいです。

※　※　※　※　※

※　※　※　※　※

左の論文はナインチーンス　センチユリー雜誌にあつたもので、譯して「文」に出て居たのを抄錄したものです。

下に記名したる妾等同志者は婦人に國會議員の選擧權を許すの議漸く盛ならんとする本日に際し、之に抗するの議を提出して男女英國人の普通感情と、敎育ある思想とに訴へんとするものなり。

一、妾等は婦人の勢力、能力及び敎育の充分なる發達を希望する勿論なりと雖、抑婦人が國家に對するの義務及び責任は全く男子と異なるものあるが故に、國家的機關と運轉するに付き其の掌るべき分業は男子の分業と其性質を異にせざるべからずと信ずるものあり。國民的生活上の或る重大なる事務の如きは、必要上全く男子のみにて分掌せられ、國會に於ける討論及び立法上の鬪爭、國家の富源を增し、國家の勢力を增さんとする至重至難なる行政上の職務、外國と交涉上の政畧、海陸軍の業務、採鑛、冶金、鐵道の如き國家重要の大工業、英國商賣上の指揮監督、我財政の整理、我が國人に食物を供する商船取扱等即是れあり。凡以上各種の業務に於て、婦人は直接に之に當り得べきものにあらず、何となれば其の天性此の類の業務に當るべき力を欠くを以てなり、生理上の差異に基きて古來發生し來りたる風俗習慣の强大なる制裁力に支配せらるゝを以てなり、其の之に抗抵したればとて果して何等の効益かある。蓋し婦人と雖も幾分か此れ等國事の影響を蒙らざるにあらざれば、隨て此の類の事亦幾分か其の勢力に感應せらるゝことを疑ふべきにあらず、實に婦人は業既に此の感應力を有したり、尙其の敎育進むに隨て影響する處愈重きを致すべし。然りと雖此の般の事務に對する直接の趣味は決して男子に及ぶべからず男子心身の勞力は每日每事此の方向に練習せらる、故に議會の進退、軍事、外交及び殖民地政畧、商賣、行政等の諸問題を直接に決するの力を男子同樣女子にも與へんとするは最不可あり。英國の婦人は活潑なる政治の有樣に相應じて婦人たるもの、有すべき感應力をば己に之を保有する事妾等の疑ふ所にあらず。

之と同時に、男女共に同等の利害を感ずる業務に於ては女子に一層必要ある地位を與ふべし否之を實地に行はしむべしと主張するものにして、果して實際的の經驗と承諾とより然か云ふものあらんには、妾等固より之に同感を表す。學事衞生其の他必要ある會合の投票人として、又委員として、婦人は既に公共事業上、必要の地位を占むるに至りたれば、其の性質も其の社會的感應習慣も共に愈進步すべし。凡此の如き近年の變化と之に伴ふ所の婦人敎育の進步とは妾等熱心に之を欲するものあり、然りと雖も今日婦人の享受するに至りたる自由は其の體力の支持し得べき際限に達したり。即男子の職業と女子の職業との間に存在すべき大差異の許す限りは己に其の極度に達したり。病人若しくは癲狂人を看護すること、貧人を取扱ふこと、兒童を敎育すること等凡此般の義務及び其の他の實務に於て、婦人は早充分なる實力を得たり、是れ妾等の滿足に思ふ處なり。然れども外交政策、殖民政策其他重大なる政體上の變化に關る問題に於ては、概するに之を裁制するの材料となるべき必要ある經驗は男子

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の如く女子未だ之を保有せず、否保有し得べきにあらざるなり

要するに妾等は婦人をして公共的の實務及び社會的の活動上充分なる配當に與づからしめんと欲するものなり、妾等は思想、良心、德義の威力に支配せらるゝ開明社會に於て、婦人の勢力の增加するを喜ふものなり、然りと雖も男子の生理上の能力、其の蓄積したる經驗、遺傳したる熟練は不要なる婦人の關渉なくも、政治上の問題を處置するに充分なるに、强て女子をして行政、兵事、財政等の事務に關係せしめ、男子と共に評論し、男子と共に運動せしめんと欲するものあるに於ては、飽くまでも反對せざるを得ざるなり。

二、妾等今婦人の權理より撰擧權に遷り（前述の基礎を取りて妾等は撰擧權を非とするものなれとも）、此の撰擧權を有するため其性質地位及び家事上に及ぞすべき影響に就きて考ふるに、大に疑なき能はず。論者曰はく、政治上に婦人の關與することは德義上有効なりと。　然り從來の經歴に就きて見れば、實に斯くありたり、若し婦人の敎育を進め其の實効もて婦人の能力と增進するものならんには、此の効益一層顯著なるべし。　然れとも試に問はん、此の所謂道德上の影響なるものは果して何等に基くものなるか。　妾等は信ず、此の影響は今日大に發達せんとそる婦人の自然的地位と作用とに基くものなり、而して活潑なる政治上の闘爭に關係するに於てハ大に損害せらるゝものなり。　要するに婦人の同感と無關係と云ふとハ政治上に德義的の制裁を與へたるなり、故に何等の傾向にもせよ、此れ等の制裁力を蓄藏する原因を撲滅せんとするは、不幸之より甚しきはなし、黨派的必要及び競爭は此の力を保持すること能はず。　婦人にして若し政黨競爭に關係するものとせんか、其の熱心し易き天性と其の鋭敏なる氣質とは一層劇烈なる黨派を生ずべし。　現在婦人は政治に對し同感と無關係とを維持して黨派的爭闘の弊害を防ぎつゝあるなり。　婦人にして撰擧に關係するとせんか、事物の此の狀態を轉倒し、國家之がために大困難に陷るべきや疑ひなし。　假令男子のみにて國會議員投票の義務及び特權を有するにもせよ、公民たるの權理は又格別にして投票權の有無に關係するものにあらず、社會公共の利益を思ふものは即眞の公民たり。　婦人は投票權を有せずして、反て國家の上に貴重すべき影響を與ふるなり、其の感覺の鋭敏なること、事物を綿密に考察そること等、婦人特有の美質をして、大に習練發達せる男子の判斷力を影響するものならんには、其利用實に正鵠を得たるものなり、然れども若し此の鋭敏なる感情にして、直接に社會的運動に活用せられ、廣汎にして且繽紛たる政治上の事務に適用せらるゝものならんには、政治の危險愈增加し、現に國家の幸福を進むるもの、一變して不幸を誘導するの原因とならん。　されば婦人にして尋常政治上の運動に關係するときは、左なきだに增長せんとする黨派的增疾心を愈熾にし、其の弊害を增進し、婦人特有の德操を鈍澁し、國家道德力の因源を個らそのみならず、現在の有樣にては漸次なるが故に有益なる婦人の感情影響を變化し、政治上にも、社交上にも恐るべき結果を現出するや必然なり。

三、婦人に撰擧權を與ふるの一事は、重大なる政治上の困難

に圍繞せらるゝものあり、若し男子と均しく未婚の女子に投票權を與ふるとせんか、一方に於ては不道德なる生活をなすものは實力を得て、更に世故に經驗ある既婚女子は反て排除せらるゝが如き有様を現出せん。　此の困難を除かんとてか概して婦人撰擧權の贊成者は必要なる財産上の資格を定め、既婚女子にのみ此の特權を與ふべしと主張す。　政治に關係するもの、區域をして果して婦人社會にまでも及ぼすべくんば、是れ實に良方案なりと雖も、斯くては家事上の模様を一變すべし。　此の議たる未誰しも適當に攻究したるものなし、小數の財産ある婦人にして其の財産相當の勢力あり、且つ國税を拂ふの結果として社會的保護と安全とを得ながら單に參政權を有せざればとて憤激するものあり、屢妾等に同意を求む、然れども妾等の考ふる處にては此の悲憤は實に其意を得ざるものなり。

四、婦人撰擧權の議漸く政治上の實地問題となりたれども、決して立法上の許可を得べきものにあらず、何となれば一時の社會的變化に出でたればなり。　直接に之に關するものは驚くべき程無關係なり、熱心に此權理と要する一般の渴望なし、是れ其の悲憤慷慨の眞實にあらずして女子選擧權の必要あらざる證なり。　此れまでの事蹟に就きて考ふれば、此の問題の要用なるを認むるに足らず、又未だ此の問題に就きては充分なる研究をなしたるものなし。　婦人に選擧權を與ふべしとの議に贊成したるものは、何等の考案もなく、單に自己等の黨勢を張らんとする一時の策略に出でたるものなり。　國會議員中には、眞心上より此議を贊成する人もあるべしと雖、現今本題の人目を引きたるは專ら黨派的勢力を增さんとする臨時手段に基きてなり、果して然らば黨派的利益心より出でたる本題、固より贊成するの價値なし。　近き中に行はるべき改撰期に至りなば、新に撰擧人の資格を得たるもの甚多かるべく、此れ等新撰擧人はそれぞれ何れの黨派にか屬すべく、且國事を共作するの習練を要すべし。　此般の變化尙新にして、且其出現尙不確なる間に、我が國政治上の觀相に更に變化の加はる如きは妾等の好む所にあらず、殊に此の變化にして熊其の區域を擴張し、男女の兩姓に及び、兼ねて家事上にまでも其影響を及ぼその勢あらんには、妾等之を欲せざると一層甚しからざるを得ず。

五、説をなすものあり、曰はく、若し婦人にして撰擧權を有するものならんには、其の効果として婦人に不都合ある法律は速に改正せらるべし又女子勞役者の如き、未公共の注意を惹くに足らざるものも投票權を得ると同時に其の價値を增すべしと。　妾等將に答へて云はん、過る五十年間に婦人に對する不正の法律は既に大に修正せられたるにあらずや、啻に否らさるのみならず婦人の教育進步し、婦人の社會的勢力彰著となりたると同時に、婦人の權理を伸張せんとする一般の傾向、及び男子の間に義心と同感の發起したるは妾等の事に認むる所にして、大に喜びに堪へざる所あり。　此こに於て女子の實業に關するも、女子をして男子と直接急激なる爭鬪に與からしむる政治上の權に訴ふるよりは、寧自討畫し、自助成し、且男子に於て發達しつゝある公平なる輿論に依賴するの安全にして而も有益なるを認めたり。

終りに臨みて尚一言すべきものあり、婦人の地位と價値とを損害せんとするもの程妾等の心に快からざる者なし、何となれば妾等は婦人の分掌する業務の宏大なる影響を社會に及ぼすものあることを認承するものにして、此の力を損するもの、如きは妾等能くまでも之に抵抗せざるを得ざればなり。妾等は信ず、婦人にして、單に外形上男子と同等ならんと欲するは、蓋し無益なるのみならず其の德操を墻害するものもることを、何となれば女子眞正の品位と其職務とを全誤解せしむるものなればなり。男女と稱する人間の二大部類は、各其の特種の業務と固有の能力とを以て自他の幸福を增進すべきものあるに、兩者をして直接の鬪爭に陷らしむるものは國家の大不幸にあらずして何ぞ。

紐育國民雜誌の婦人批評

批評には目が拔けぬとの評判の有る紐育國民雜誌の記者は女性の詩人に就いて思ひ切つた評をしました。記者は初め自分の何處までも力の及ぶだけは女性を保護する氣であるといふ事を公言した末、やがて近頃の女性の詩に就いて評を下し、なほ一般の女性の文學思想に括つた說をつけました。

記者の言ふところに因れば、女性で詩學にもよほど感情が烈しい最高點、すなはち白熱のところまで達したのは殆んど無いくらゐの有樣で、たゞ僅にへれん じやくそん女史の「うとんてエむ」、さくすはるむ女史の「すりい きせす おふ エあうエる」などが白熱と許せば許せるくらゐ、その餘は大抵紅熱にとゞまるばかり。多數の米國女性詩人は年々あらはれは現はれても、其實ふすぶる位の處で消えて仕舞ふといふ趣です。

この批評は隨分はげしい說、たゞ今日の米國婦人の文學上に於ける有樣を評したのに止まツた論であるならば別に彼是喙を容れるにも及ばぬもの、、しかしこの記者の考が婦人は一般現在も未來もこの規則の下にあるといふ點にあるならば記者の疎漏をあざけらなければ爲りません。二十歲の若者の走り相手に三歲の小兒を與へ、そして小兒の足が若者より遲いと言ッて擯斥されましやうか。いかにも米國の婦人は、この四五年來大きに社會にもあらはれました。が、それがわづかの年數です。今女性が文學界に於ても男子と爭へるやうに爲りは爲ッたにしろ、その爲ッたのは一つは血氣の熱心がろの主は根をなして居たので、即ち其素、言換へれば其遺傳や習慣として承繼ぐものゝ實に男子ほどで無い、それ故に今日のがいくらか一般の男子と相違して居るのです。即ち凡そ詩を爲る材料に於ては今までのところ婦人は男子ほど澤山持つて居ず、音樂の結果は語れても原因は言へず、景色の有樣は悉して居ても變化は知らず、すべて美を美とするだけの腦は有つても何故に美を言へるといふ解釋の腦を持たなかつた、それだけが原因であつたので、既でにこれに原因あるならば、それが進んで往くといふ事は如何な保守論者でも言へるには違ひないことで、國民雜誌記者が一概に擯斥したのはいはれの無い、つまらぬ論です。

曾てめれい さまアびる孃の數學を修めて大に人からあざけられ、「あら私は不運に生れた。助けてくれる人も無い」

を聴いたのは今でもわれ〳〵の耳に殘ッて居て、そしてまたふアんまいめんでるそぞん孃が音樂書を出版する時に男子の名を假りて發兌しろと勸められたのはまだわれ〳〵の記憶にあります。　女子が今日のところ、賴もしい未來の芽を出して居ると言つて尙ぶ人よりはむしろまだ萌らぬ芽を出して居るを冷かす人の多いのはまだ今日世界一般の風習です。女子をば敬愛するものたとの一般の論はあつて社交上その義理に迫られ、仕方なく陽に敬愛の風をよそほふて內實また冷笑して居る學者紳士、求めればその數も多いことでそ。

これも多少女子に力を與へる妨害を爲して居るので、之に厭服されぬ女子はまた恐ろしい飛上りで、熱狂の極ついに山師流の事業をして世をおどろかせやうなど、望み出します。女子の屈辱をうれへて自から進取の氣をつくるのは惡い事でも有りませんが、動もすれば怒り易く、憎みやそく、優美の德よりは苛酷の弊、やさしさよりは意地わるさを起し、終に凛然として居れば受けられる益までも失ふことさへ有る程で凡そ是等はまた一槪にまだ食過ぎる肥料を望み、まだ住みなれぬ鉢に入り、終に天眞の花、自然の葉をも損じたり何かします。

今英領印度學事報告を讀んでもわかりまそ、一千八百七十七年から翌八年までの一ヶ年間に英領印度の學校を通過した生徒は男女併せて百八十七万七千九百四十二人、その中女子は十萬人ありました。　それでその女子の形跡は何處にあるか、今日まで既に十年を經ましたが、見えません。　多少女子が競爭の地位に於て男子に劣るのも原因ではありましやうが、しかし社會のまだ充分に女子を見ぬのもその一つの原因です。　その證據と言ふ程の事でも有りませんが、ばむぺれの大統領の手から官公學校の優等女生徒に賞品を與へ、そして斯う言ッた事さへ有りました。「淑德の婦人はたとひ其夫醜くても、惡性でも、善性でも、多病でも、怒り易くても、酒呑でも、老人でも、頑固でも、啞でも、盲でも、聾でも、貧乏でも、吝嗇でも、下賤でも、臆病でも、不德でも、何でもすべて夫とした以上は心、言葉、及び擧動に於て充分之を神とし尊ぶもの。　其人に荒々しい言葉をかけた婦人は犬、豺などに生れて人里の無いところに住まなければ爲らぬ。其人にいやしい言葉を向けた婦人は終に啞に生れる」。壓制のはなはだしさ、實に古代を見るばかりの有り樣、そしてこれらの女子が婚嫁するのもそれ程ゆゑ無論當人の承諾は第二の勢で、そうして世界の女子教育家が最も注目すべき事は、凡そ此訓誡、及び此賞品の書籍はすべて甘んじて、英國政府が出すのです―

あるなど多少の政畧も有ッて彼是非理の繩を婦人の身にも加へるのでしやうが、しかし其處にも度があります。　有名な印度のらまばい女史、その女史が歐米を巡つたときに好い顏をして一般英米の貴婦人および紳士は迎へました。　が、矯正の勞をばらまばいにのみ托して、かへつて建白を英國政府に出して大古野蠻の面影を去らうといふ人士は一人も有りません。

すべて卑しむ事も見馴れ、は感化されます。　理から言へば婦人を壓制するのは宜くないことを、知れて居る、其處に世

の厭制が見える。　かうなつて來るとその厭制をいやしむと同時、またその厭制を見馴れて、果はいやしまず、憚れまぬやうにもなる、是等がまた開明の人民に反動を與へる原因で、現に燈臺下暗し、自身の國に、品こそ違へ、五十歩百歩、なは公然と婦人をいやしむ風があるのに氣が付かなくなります

（未　完）

美術家いゝすと氏の美術演說

極りきつたのハ西洋人が日本美術に關した臆測の演說で、その御忠告を下さる熱心は有難いですが、現にすくりぶなア雜誌にさへ中々の當推量は出て居る次第、用ゐやうでは益にあるかも知れませんが、將來の日本美術に關する外人の說ほど危險なものはありません。　全体の處ろ吾々とていゝすと氏の說に反對もしません。　しかし議論のさして立派で無いといふだけは評します。　ことに日本に未だ完全の感情的の美術が無い、日本の詩歌文章にもまた左樣だとまで言はれた御大盲には恐れました。　今までに充分の批評家が出ず、文學をばいゝくらゐにあしらつて居た昔（？）の輿論を種にしてよくも敏捷に斷定を付けられました。　あゝ源氏物語の觀は謝か、瑕留か。　明珍の意匠は感情的か批評的か、しばらく十年の後批評家の出た上で評論をしていたゞきたい者です。

「わたくしは冬でも單の物を着ますの」。
「おや、それぢや御さむうムましやう」。
「なに寒くはムいませんの。　下着に着るのですもの」。

寄書

先日松本順先生の處へ上りまして色々御話を承りました中に此樣の事が有りましたから皆樣の御爲めになる事もあらうかと存じ筆記して貴社に寄せます余白が在りましたら御記載下さいませんか　司馬あや子

過般各地ニ旋行ヲ試ミタリシガ至ル所ニ衛生會アラザルナク種々自衛ノ利害ヲ講談セリ併シナガラ皆西洋ニ流レ牛肉ヲ食ヒソップヲ飲ムガ如キヲ以テ單ニ衛生ナリト心得ルモノモアルベシナレド如何ニ滋養品ヲ食スルモ運動其宜シキヲ得ザレバ唯腐敗物ヲ腹内ニ堆積スルニ異ナルナシコレ西洋流行ノミ我日本ニハ日本適當ノ衛生アリ先ツ人ノ健康ニ關スルモノヲ區分シテ三トス

衣食住即チコレナリ然シテ各國ノ建築ヲ見ルニ煉瓦高樓ハ堅固ナルガ如ク甚美觀ヲ呈スルモノアルモ衛生上ニ取リテハ我日本ノ家屋建築ヲ以テ秀逸ナルモノト思フナリ何トナレバ家屋ニ必要ナル空氣流通日光ノ明射ニシテ善クコレニ適スルヲ標準トシテ論ズレバ空氣ハ水ノ如キ流動物ナリ故ニ水ハ低ニ流レ空氣ハ常ニ上騰代謝ス洋風建築ノ天井ノ高キハ恰モ深キ桶ニ水ヲ納ルヽガ如クソノ桶ノ低ニハオリノ溜ルガ如ク窓モ天井ヨリ五六尺ノ下ニアレバ恰モ空氣留ムル水桶ノ如シ必ス汚穢ノ空氣充滿シテ其健康ヲ害スルヤ知ル可キナリ日本ノ如ク快活ニ空氣ヲ流通セシムルノ構造トハ其利害ノ衛生ニ關係チ及ボスヤ明ラカナリ殊ニ椽側ノ如キハ克ク溫暖ヲ保チ大陽熱ヲ遮ギルノ効其多シ日本流ノ家屋構造法ハ自然ニ建築ヲ保ツノ理當レリ盡セリト謂ツ可シ

西洋人ノ性質ハ愚直ニシテ勉強心ニ富メルノミ西洋ノ陸地廣大ナルモ日本ノ如キ秀靈ナル好景ニ富ザルナリ彼レ流行者ハ七階ノ高樓ヲ以テ堅固美麗ナリトス鐵製ノ大橋ヲ望ンデ感嘆直チニ眞似シテ日本ニモコレヲ造レリ然レド日本ニハ自カラ日本ノ氣候アリコレニ適當ナル家屋アリ豈西洋瘠地ノ寒冷ナル不眞ノ國風ヲ學ブベケンヤ

佛國ノ如キハ觀望窓ニ稅金ヲ賦課セリ依テ常ニ小窓ヲ設ケコレニ玻璃ヲ以テ戸トスコレカ爲メ空氣ハ益々功迫スルカ如キモ日本ハ中和ノ氣候アリ冬ハ三十度内外ヨリ夏モ九十度内外

トス然レトモ冬夏モ人間ニハ凌キ難キ不良ノ氣候ニアラス窓ニ税ヲ課セル國ハ空中空氣ニ乏キ故ニ天井ヲ深クシテ呼吸ノ用ニ供スルモ可ナリ日本ハ窓ニアラズシテ口開キ次第ナリ如之障子ヲ張ルニ美濃紙ヲ以テシ之ヲ天井下ニ貯フル空氣惡キニ比フレハ其差異如何ナランヤ日本建築ノ家屋ニ天井ノ低キヲ咎ムルハ笠ヲ冠ムリテ戸外ニ立ツ人ヲ以テ空氣ノ不足ト云フカ如シ

次ニ衣類ナリ日本ノ衣類ノ裁縫ニハ針目ハ裁粗ナリト難スルモノアリ然レトモ垢付ケハコレヲ解キ離シ洗濯スルニ便利アリ西洋ノ衣類ハ然ラズ針目ニ密ナルヲ貴ヿナルカ塵埃ハ針目ニ集積シテ其不潔ナルヲ知ルヘキナリ且洗濯ノトキニハ最モ不便ナ與ルガ如シ其利害ヲ考フルモ前說ノ妄ナラサルヲ知ルニ足レリ

西洋ハ大抵雨少ナクシテ一日中僅カニ一二度ノ微雨アルノミ而シテ彼レノ雨ハ眞直ニ降下シ日本ノ雨ハ橫ニ下ル關東ノ如キハ雨ヲ斜ニ降シ碓氷嶺ニ至レハ下カラ雨ヲ灑クナリ然ルヲ西洋ノ如キ庇ナキ家ヲ悅ブハ實ニ不可思議ト云フヘシ

次ニ衣服ハ何ノ爲カト問ヘバ寒ヲ防クニアリトス是レ誤レリ内ヨリ外ニ出ツル蒸發氣ヲ防キ以テ適宜ニ体温ヲ全フシ温ヲ保ツカタメナリ寒ヲ防クニアラズ人体ハ温ノ本源ナリ外寒ヲ防カントテ鎧ノ如キモノヲ被ラハ外氣ニ當ラザルモ尙ホ凍冷スルナリコレ銅鐵ハ人身ノ温ヲ奪モノナレバナリ

日本製ノ木綿ニ綿ヲ入タル程心地良キハナシ何トナレハ善ク温ヲ保ツヲ以テナリ又夜中長ク厠ニ行キテ歸ルモ未タ其温ノ去ラザルヲ以テモ知ルヘキナリ

日本ノ衣服ハ甚佳ナリ何トナレバ背部ノ如キ肉厚クシテ寒ヲ防クモ胸腹ハ冷エ易シ而シテ日本ノ製ハ前部ヲ二重ニナシアルヲ以テ克リ胸腹ヲ行ルヲ得ナリ

日本服ニハ帶ヲ締メル事多ケ所ニシテ血液ノ運行ヲ妨クル事少ナシ彼ノ西洋服ノ鈕多ク緊急纏キ衣服ニ優ルコト萬々ナリ又人力車夫ノ如キ勞働スル者モ股引筒袖ヲ以テス働ク時ノ便利モ善ク適當ニシテ西洋ニ優レリトスベシ然シテ禮服ニ至テハ飾ニシテ建康ノ論ニアラス彼我皆只其國風ヲ存スルノミ

西洋ノ肉食ヲ專ラトスルハ彼國ニ在テハ殊ニ善ナルカ如シ然レトモ人口動作ノ多寡ニ適セサルヘカラス肉ヲ喰牛乳ヲ飲ミツヽ ブヲ綴リ葡萄酒ヲ服スル等其滋養ノ點ニ於テ良ナルモ之ヲ得ルモノハ財産家ニシテ銀行ノ利子株劵ノ配當ヲ以テ常ニ遊ブ許ノ人ニシテ肉食ハ何ノ用ニモナラズ却テ病ノ原トナルノミ其勞働ヲ以テ日々力作スル西洋下等人ハ惡パント惡ジガタラ芋ヲ得ルノミ漸クニシテ鹽肉ヲ一週一度位ニ止ムルナリ然ラハ西洋流食物論ハ實用ニアラズ徒ラニ驕奢ニ走ルノミ日本ノ下等人ハ肉飯ヲ喰ヒ白酒ヲ飲ミ味噌汁ヲ吸ヒマグロ餔饌餘如キヲ食フ者ハ克ク動作ニ堪エテ甚善ナリ富家ノ洋食ヲ得ル人達ハ國ノ用ニハ立ズ其預ケタル黄金ノ方カ却ツテ人ヨリ功アル事多シ如斯人々ハ健康ナラズシテ死レテモ損ナキナリ農夫工商ハ國ノ本ナリ衛生ノ道甚メ反對セリト云フヘシ諸彦流行諸生ニ煽動セラレ本來ノ美風ヲ失フナカラン事ヲ希望ス

通信問答

心得●第一、御問合の事が其答を載せるいらつめより六號以前までの間にあればそれより委しい答と爲ず、唯その在る處をのみ言ひます。尤も其以前に屬する分は更に委しく言ふのは無論の事です●第二、御問合の文章ならびに文字は成るたけ明かに書く事。

小藤さまへ　ペエあすの石鹼は色を白くするのに有効でせが此頃贋造が出來て一寸素人には見分けられません。唯九十錢ぐらゐの安物を買はず、一圓以上のを御買ひなされば大抵失策は有りません。

木村さまへ　脚氣治療には轉地療養が一番です。不消化物、脂肪の多過ぎる物などはいづれも毒です。發因は大抵濕氣の地所にあります。未發に防ぐには、それ故、高燥な地に住ふばかりです。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

木島きぬ子さまへ　（一）瓢簞に色をつける手輕な法は稀硝酸を隈なく塗るか、鉄漿と石灰と交ぜて引くか、假漆を塗るのです。　硝酸と仮漆では黄色、鉄漿では黒色が付きます。　いづれも瓢簞がよく枯れてから行ふのです。（二）竹に摸樣をつける其竹は生ですか、枯れたのですか、それ次第で色の附け方が違ひます。（三）爪際の皮の荒れたのはリスリンを濃く直附けるのと怠らなければ直ります。

片桐こま子さまへ　ハンドコロンを成美社で製造して賣るやうにとの御注文があまり諸方から參りましたから折角の事故その製造を神田南神保町の藥舖翁屋に托しました。　それ故、そこで御買ひなさい。

小林安子さまへ　（一）黒子を去る法はいらつめ第廿一號通信欄内村松きみ子さまの答に出て居ます。（二）顔の荒れはリスリンを塗れば直ります。（三）アザを去る法はいらつめ第廿五號通信欄内みどり樣への答に有ます。（四）色を白くする法の最上法はいらつめ第廿四號通信欄内琴水女史への答にあります。（五）顔の毛を拔去る法をば得ましたが些し取調べる處がありますゆゑ、間違なく次號に出します。

はつ子さまへ　前の小林安子さまの第五を御覽なさい。

長澤さまへ　（一）分量をあやまりさへしなければ砒石も毒には爲りません。（二）砒石を呑んだため子が出來ないやうな事は有りません。

吉野女史さまへ　形容も面白く、趣向も高尙で、そして優美なのはすこつとの湖上美人の詩（ゼ、レデイ、オフ、ゼ、レーク）です何もあまり六づかしくは有りません。　人好きのする詩です。

狩野たけよさまへ　（一）前の片桐さまへの答を御覽なさい（二）レモン液の日に燒けたのを落す水は神田南神保町の藥舖翁屋へ命じて作らせました。　梅の雪と言ッて同家から此頃賣出すのが其です。　之を御求めになるのが德です。　レモンの外に猶一二種混てありますから肌には宜しいです。（三）縮れ毛を直すのはいらつめ第廿二號通信欄内にあります。

司馬あや子さまへ　（一）世界語は多少獨逸で行われて居ますが、まだ花々しくは行きません。（二）藥を飮んだくらゐで記臆がよくはありません。（三）近頃は西洋で左の書物が一寸はやります。　すべてりつぴんこッとの版で　Amelie Rivesの The Witness of the Sun（新作小說 定價一圓）、ConversのMarriage and Divorce in the United States（統計論 定價一圓半）The Duchess の Jerry（新作小說 定價半圓）Ouida のGuilderoy（新作小說 定價一圓）その餘は古來の詩文集です。　ミセズ、ヒーマンスの詩集など一圓前後で、それで日本でも得られて贈品には結構です。

餘白の乏しい爲殘念ながら猶澤山殘しました。〇前號蚊を驅除する法の答は長門のたみ子、信濃の旭照雄、及び櫻井はな子の三君から送られました。其中で櫻井はな子のが最も宜さゝうです。即ち蜜柑の皮、茄子の皮、黄菊花、右三品を日に干して粉にし、火鉢で一寸燒くのです。併し三君へはいらつめ第廿六號一部づゝ差上げます。

疑問〇蜜柑を翌年の春まで貯ふ法、木島絹子●蟻の座敷に上らぬ法、司馬絢子●手のひらの豆を去る法、同上●以上の三法を確に御答の方にハ其答を載せたいらつめ一部差上ます。

餘興

賞品は最上の匂ひ袋一つ五十錢以上の物

新謎題

(一)出來た時は野菜で、後は魚になるものなアに。　足立ふみ子

(二)わづか一尺一寸で多くの人が出入の出來る家が有るとの事だ何だらう。　信濃高橋

(三)飲んでも〳〵腹のふくれぬものはなアに。　くろん坊

(四)歩いても埃りが立たぬ道はなアに。　芙蓉散史

(五)家には窓が無いから、主人が外へ出るときは家を打ちこはして貰ふものなアに。　同上

(六)初めハ足が澤山、中頃には皆無、末には六本出來るものはなアに。　撫箏女史

(七)妾は始終木の中へ押込められ、色々の人の御友だちになります。妾は働けば働くほど身長が低くなり、其働く時には時々接吻されます。　同上

右七題解答の方には最上の匂ひ袋一つ差上げます。五題だけ解答の方にハいらつめ一部進上。答は解當用紙に御認めないものは沒書。

九月五日しめきり。

懸賞題の發狩の應募得點者ハ既に決まツて居ますが、又餘白の無いため殘念ながら次號に讓りました。次号にハ屹度。

いらつめ第二十五號目次

●社説○日本女服改良會●小説○繡鴛鴦(第五回)●家政○室内粧飾法の内床の間の飾方○暑中に冷水を飲むの害を避くる事○水に溺れたる人を救ふ事○卵の新陳を知る法○卵を貯ふる法●文藝美術雨夜の品定め(續き)和文の變遷(第四)柳櫻都錦繪(三幕目大詰)●批評○新編紫史第二編○立志美談●雜纂○流行に付て○日耳曼國音樂大家マザート氏の傳○千鳥●懸賞文藝○第三回の賞を得たる文と歌俳句○第四回新題●通信問答○陶器製造法‖家計簿記自宅獨修書‖平算教科書‖仙臺平へついた油垢を落す法‖虫歯の痛むのを止める法‖男羽織の紋‖玉子の分料に付て‖額の生際を濃くする法‖大聲で物を言ふとき咽喉の痛くなるのを防ぐ法‖髮の毛を柔にする法‖最上の枕‖片寐を直す法‖最上の石鹸賣捌所‖ランプのホヤを接く法‖かうろぎの異名‖化粧水の使ひ方‖わきがを治す法‖アザを抜く法‖皮膚の毛を除き去る法‖口中の腫れや荒れを直す法‖居候のこさ‖髮の毛へつける油‖最も眠るに善き位置‖赤毛を黒くする法‖廿四時中適宜の働方‖寄宿舍の正しい女學校‖細君が他人に對しての夫の稱謂‖髮を洗ふ法‖縄を取る法‖蚊のたしかな驅除法‖小兒の寐小便を治する法‖毛を生やす法‖人參、唐白朮、貝毋の事‖ちりめんの汗しみ及び鹽氣のしみを落す法‖歯の黄色になつたのを白くする法‖小説で讀んで害にならぬ書物の名‖女子の速記學を學ぶ事‖波に兎をつける原因‖醤油の黴を防く法‖梅のす漬法‖人情小説で無いもので讀んで益になる英文小説●廿四号の解答質問一題●餘興●月報

社告

江湖の淑女君子の中で小說を著ハされ、その删正を望まれる時にハ成美社では左の條規に因ッて請求に應ずる事と決しました。

(一)成美社でハ無手數で删正する事。(二)草稿返却の時に要するだけの郵税を著者から成美社へ宛て草稿さ一途に送るべき事。

(三)四十日以内に成美社では草稿を删正して著者に返却する事。

(四)草稿の秀絶なのは都合に因り、成美社で之を相當の價で求め、いらつめへ出すら、他の雜誌或ハ新聞紙に賣却の紹介を爲すかいづれか爲す事。(五)もし(二)の手續を著者が充分に履なかッたならばその草稿は沒書する事。

右の條規に從ひ、凡そ此規程を履んだ草稿なば成美社でも此規程を履んで取り扱ひます、以上五ケ條に御不承知が有りませんなら折角御遠慮なく御申込なさい。

いらつめ第十二号もし御不用の御方候は、買戻しなりとも又は爾後發兌のいらつめ二回分と交換被下とも御都合により宜敷候間御送り被下度候但汚損つよきものと郵税先拂さハ御斷申上候

○いらつめ定價、並製一册金八錢、郵税共九錢、半ケ年分(六册　四十五錢、郵税共金五十一錢、一ケ年分(十二册)八十錢、郵税共九十二錢、別製一册金九錢、郵税共十一錢、半ケ年分(六册)金五十錢、郵税共金六十二錢、一ケ年分(十二册)金九十錢、郵税共金一圓十四錢府内ハ郵税ヲ兎ズ○毎月十五日發兌雜誌儀ハ前金ニアラサレハ御送附不申候金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラバ拂渡郵便局トアル所ニ(神田郵便局)ト記シ受取人欄内ニ(神田平永町九番地成美社)ト御認メ被下ベク候又郵劵代用ハ郵便爲替ノ無キ地ニ限リ一割増ナレバ妨ナシ見本ハ一錢切手ニテ並製九錢別製十一錢ニテ發送可仕候

發行兼編輯人　山田武太郎　印刷人　佐野忠吉

東京神田區平永町九番地

發行所　成美社

明治廿二年八月十五日發兌